

第50图 D地点出土土器实测图2 (20~40) (S-1/2)

25は5次5 T出土とともに雲母を含む胎土である。24は薄い作りで、内面には板状工具による調整があり、外面はナデ仕上げである。25は外面に条痕があり内面はナデ。26は3次6 T出土。内面に明瞭な条痕があり、外面は条痕を縦方向にナデ消している。27は5次3 T出土。内外とも条痕による調整である。

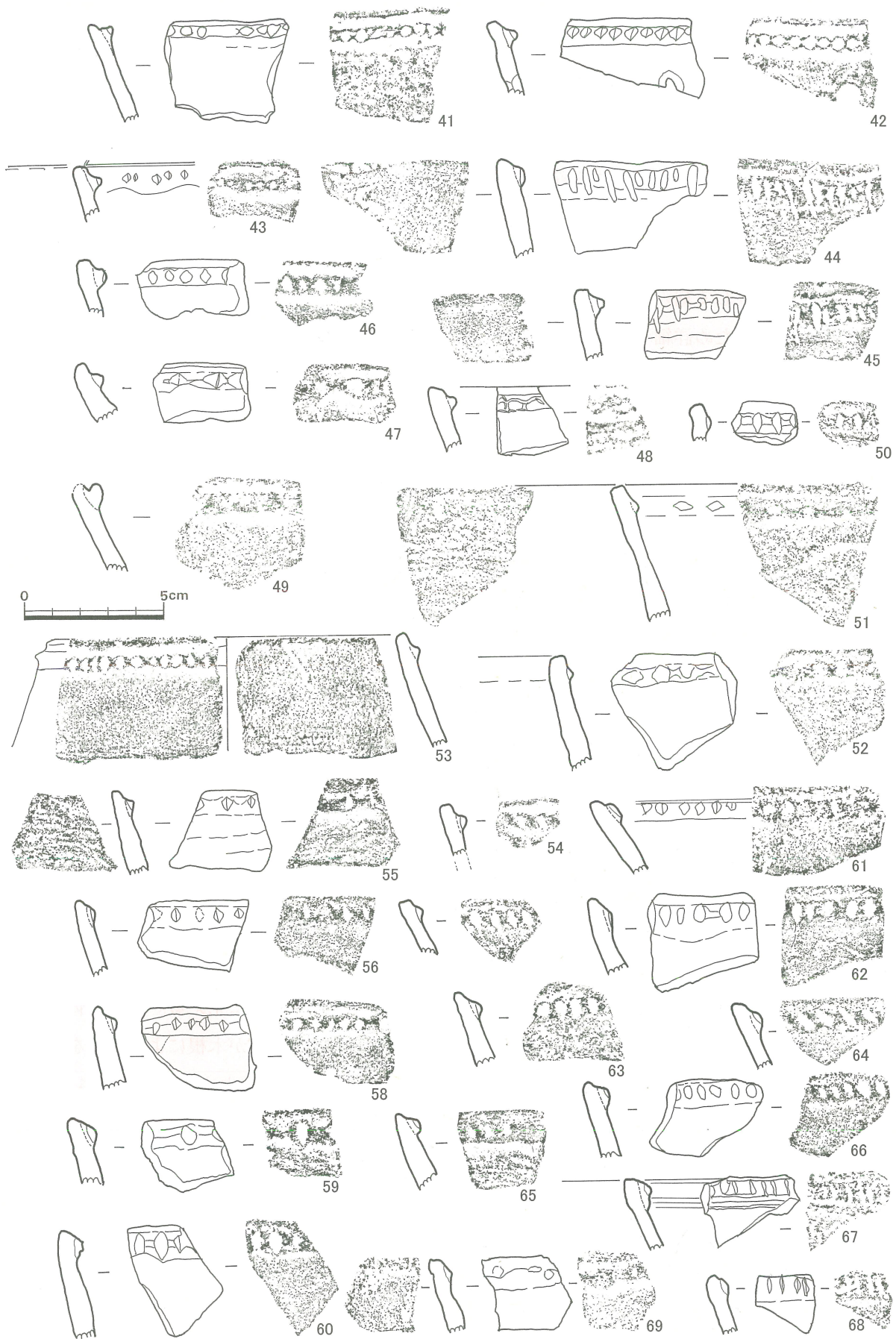
28～33は内傾する甕の口縁で刻みをつけないタイプである。いずれも屈曲部まで含んだ破片ではないため、胴部に突帯を持つものかどうかわからない。28・29は5次3 T出土。28は内外とも条痕の調整。口唇の形状に変動がある。29は口唇部にふくらみを持たせている。内面はナデ。外面の調整は条痕であったと推定される。30は8次1 T出土。口唇部は角張った部分と丸い部分がある。内外とも条痕による調整。31は7次5 T出土。頂部には角がある。口唇部がややふくらんでおり、あるいは刻みのない低い突帯を付けているのかもしれない。風化著しく調整不明。32・33は3次6 T出土。ともに薄い作りである。32は板状で曲線をあまり感じさせない破片である。口唇部を内側へ折り返している。調整は条痕を施した後、ナデ消しているように見える。33は口唇部を外側へ折り返している。調整は32に同じ。34は口唇部を欠くので、刻み突帯のある甕の破片かそうでないか判断できない。外面は荒い条痕、内面は丁寧な削りが施され、平滑である。7次1 T出土。

2) 刻目突帯のある甕類の口縁 (第50～53図35～114)

刻目突帯のある甕類の口縁と見られる資料は、出土点数が多いためA～Hの8グループに小分類した。主たる分類基準は、突帯の付けられた位置(口縁端からの距離)と突帯そのもの高さ(大きさ)である。口縁端からの距離が大きく突帯が高いもの(結果的に指頭で刻みを入れたもの)をAとし、突帯が小さくなり、かつ口縁端に近くなる傾向を順次B以下に分類した。ただし、一個体であっても突帯の位置・大きさには変動があるため、各分類には重なる部分があり、一応の便宜的分類として提示したものと理解されたい。

A. 35～40 このグループの突帯の位置は、口縁端から最大7 mm離れており、高さは最大5 mm程度である。すべて指頭で刻みをつけた資料である。このうち35・36・37の3点は6次6 Tから出土している。35は大振りの破片である。刻みの中に爪痕が残る。外面には貝殻腹縁によると思われる条痕があり、内面は条痕をナデ消しているように見える。36も刻みの中に爪痕があるが、この突帯は口縁に平行ではなく、左下がりに傾いている。鉢の口縁である可能性も否定できない。37は外面に条痕があり、内面はナデ消し。爪痕はないが指で突帯を押ししているように見える。38は7次1 T出土。頂部を破損している。調整不明。指頭で押さえた刻みと推定される。39は8次1 T出土。口縁端から5 mmほど下に高い突帯を付け、爪痕がつくように指頭で刻んでいる。調整は内外ともナデ消しと思われる。40は8次6 T出土。刻みが深い。爪痕がわずかに観察される。調整は不明。

B. 41～49は口唇が角張り、口縁端より4～5 mm下に高い突帯を付け、何らかの工具を用いて刻みを施したグループであるが、刻みの付け方は様々である。42・42は3次6 T出土。別々



第51图 D地点出土土器实测图3 (41~69) (S-1/2)

に作図し掲載したが、拓図が似ていることや、どちらも胎土に雲母を含むことなどから、同一個体の可能性があると思われる。41は胎土に雲母（金雲母）・角閃石を含む。調整は両面ともナデ。42には補修孔がある。それ以外は、41に同じ。43は5次7 T出土。シャープな作りであるが、刻みは小さく曖昧である。胎土に雲母粉末を含む。44・45も突帯部分の断面形状に違いがあるが、同一個体と判断される資料である。6次4 T出土。口縁頂部及び外面には丹を薄く塗った痕跡がある。刻みは細い丸棒を下から振り上げて（あるいは振り下ろして）付けたように観察される。胎土に雲母粉末を含む。46は6次4 T出土。刻みの圧力は上方に向かっているが、土器を倒置して刻みを付けたとすれば、圧力の方向は逆向きとなると言える。47は7次2 T出土。傷みのため詳細不明。刻みの外見は菱形に見えるが、指頭（爪）による刻みの可能性もある。48は3次6 T出土。突帯を上からと、下からと交互に押さえ、突帯の稜線が波打って見えるような技法を用いている。49は5次4 T出土。高い突帯をつけるが、風化著しいためどのような刻みか不明。

C. 50~53 Bグループと大きな違いはないが、突帯がやや小さいものをまとめた。50は8次2 T出土。細片のため詳細不明。やや縦長の刻みを施す。51は5次2 T出土。内面に条痕が残る。外面は風化が進み見えにくいだが、5 mm間隔で刻みが施されていると思われる。52は7次1 T出土。低平な突帯に刻みを入れているが、全体に風化損傷が著しく詳細不明。あるいは指頭刻みか。53は6次4 T出土。丁寧かつ上品な作りである。復元口径12.8cm。刻みは左から右へ進行しているように観察される。調整は丁寧なナデ消しと思われる。

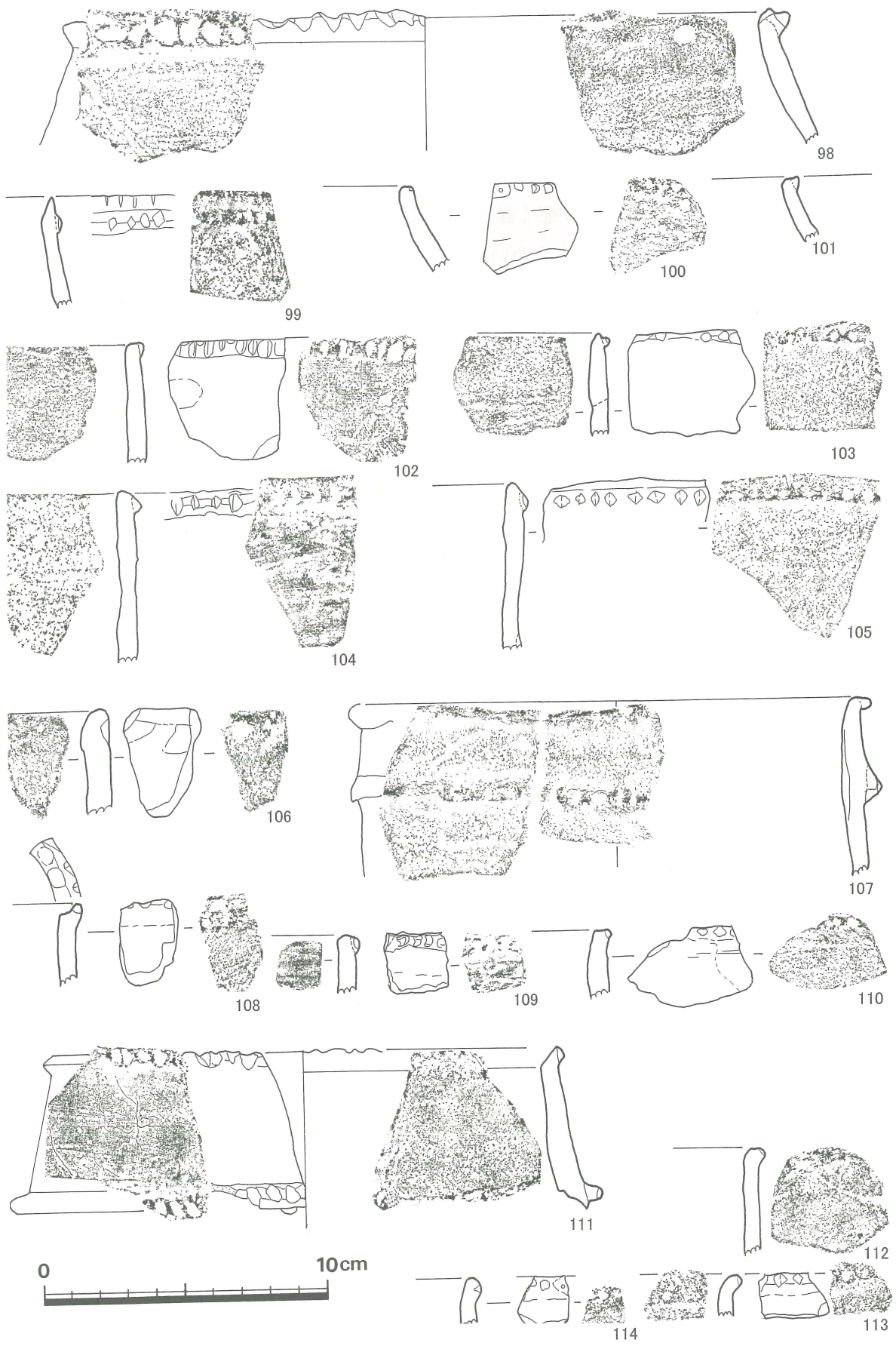
D. 54~69 ここにはCグループよりも口唇部が丸みを帯び、突帯の位置がやや上に上がるものをまとめた。54は7次17 T出土。風化のためわかりにくいだが、刻みは棒状の工具を用いたものと思われる。55・56は6次4 T出土。2点とも菱形の右側が大きくなるようなヘラ切の刻みを付けている。55の外面に炭化物が付着しているように見える。56は6次4 T出土。全体の風化が進み、調整等不明。ヘラきりによる刻みと思われる。57は5次5 T出土。丸い棒で押えたような刻みに見える。58は6次4 T出土。内面外面とも丹を薄く塗ったように観察される。刻みはヘラきりのように見えるが、細い丸棒で押えたように見える部分もある。59・60は6次6 T出土。59は外面に条痕の痕跡がある。刻みは丸棒で押えたように見える。60は全体が磨耗しており、詳細不明。61は34号支石墓（SA7）埋土より出土したが木根による攪乱を受けている。刻みは浅い。62は8次3 T出土。棒状の工具を用いて刻みを入れたものと推測される。63は7次10 T出土。低平な突帯をつけ、刻みは下から上方向に工具を動かしているように観察される。64は全体が磨耗し、刻み種等不明。胎土に雲母粉末（金・白）を含む。65は7次2 T出土。風化著しく、刻み種等不明であるが、外面には条痕の痕跡がある。66の刻みは丸い棒で押えたように見え、圧力は下から上方向に向かっている。67・68は口縁端がふくらむような作りである。67は3次15土。表面の損傷が激しいが、細く鋭い刻みを付けている。68は7次1 T出土。ヘラきりによる刻みと思われる。69次9 T出土。雑ではあるが突帯の上下を交互に押えて、突帯が波打つような刻みの付け方である。



第52图 D地点出土土器实测图4 (70~97) (S-1/2)

E. 70~98 突帯が口縁端に付くものや口唇部と一体化していると表現すべきものをまとめた。70は7次調査10T出土。口径20.2cm、胴径22cmに復元される。丸棒状の工具を用いて刻みを付けている。調整はナデと思われる。外面に炭化物が付着しており、胎土に雲母（金・白）と微量の角閃石を含む。胴部の突帯はゆるやかにうねっている。71は7次2T出土。刻み部分が損傷している。雲母を含む胎土である。72は7次1T出土。ヘラきりによる刻みと思われる。73は5次5T出土。72と同様なヘラきりによる刻みと思われる。74は31号支石墓（SA4）調査時に棺外から出土。刻みは丸棒を用いて付けたように見える。75は7次10T出土。刻目等の残りが悪い。内外とも丹の痕跡が認められる。76は7次10T出土。細片のため傾斜角度は不明。細丸の棒で刻みを入れたように見える。77は34号支石墓（SA7）棺内出土。丸い棒で押えた刻みに見える。78は8次1T出土。これも丸い棒を押し当てたような刻みである。79は5次5T出土。全体の風化が著しい。左下がりの刻目をつけていると思われる。80は7次1T出土。ヘラきりによる刻みと思われる。81は7次1T出土。磨耗著しく、詳細不明。82は5次5T出土。口縁端に低い突帯を付け、浅い刻みを施す。雲母を含む胎土で、石英粒が目立つ。83は3次6T出土。口縁端に断面三角形の突帯をつけ刻みを入れている。口縁端は尖る。84も口縁端に三角形の突帯を付け、浅い刻みを入れている。5次6T出土。85は5次5T出土。口縁端に三角形の突帯を付け、刻みを入れている。内外とも荒い条痕による調整と思われる。ごく低い突帯をつけ、菱形が連続するような刻みを付けている。頂部には角が立っている。86は7次9T出土。風化の為詳細は不明だが、これもごく低い突帯を付け、浅い刻みを入れている。口縁端は直線ではなく、やや波打っていると思われる。

87は5次5T出土。口縁頂部を平らにし、丸い工具で押えたような刻みを付けている。胎土に雲母粉末を含む。内外ともナデ仕上げと思われる。88は6次4T出土。全体磨耗しており調整等不明。丸い棒の先端を刺して刻んでいると思われる。89は3次3T出土。口縁端が傷んでおり、刻み等わかりにくいだが、棒状の工具で刻みを入れていると思われる。胎土に雲母を含む。90も89とほぼ同様の作りで、胎土に雲母を含む点も共通している。刻みの中やその周辺に炭化物の付着が認められる。7次10T出土。91は7次1T出土。口縁端に三角形の突帯を付け、細かな連続した刻目を付けている。92は5次5T出土。丸棒状の工具で刻みを入れたと思われる。93は6次4T出土。小破片のため傾き不詳。突帯が口縁端より少し上にはみだし、頂部がへこんで見える。調整は条痕と推定される。94は5次5T出土。風化と破損の為詳細不明。刻みが頂部にかかっている。95は5次5T出土。薄い作りである。鋭い刃物で切り付けたような左下がりの刻みがある。胎土に雲母粉末を含み、石英粒目立つ。外面の調整はナデと思われる。内面は傷みが激しい。96・97は7次3T出土。96は口縁端に三角形の突帯を付け、丸棒のような工具で刻みを付けている。97は96の下方の破片で胴部突帯の直下と思われ、刻みの一部が観察される。外面は板状工具による削り、内面はナデ仕上げと思われる。雲母（金・白）を含む。外面には炭化物が付着している。98は5次3T出土。口縁端に大き目の突帯をかぶせるように取り付けている。刻みは、太目の丸棒を押し当てて付けたように見える。外面は条痕をナデ消



第53图 D地点出土实测图5 (98~114) (S-1/2)

している。

F. 99・100・101・111 この4点は内傾する口縁で、上記の分類に当てはまらなかった資料である。99は5次5 T出土。全体に磨耗が進み、詳細不明。薄く尖った口唇部とその下の低い突帯に刻みを入れている。100は7次2 T出土。内傾する口縁で突帯は無く、口唇に直接刻みを入れている。刻みは尖った棒状の工具による刺突と思われる。外面に丹塗りの痕跡がある。101は5次3 T出土。破片の状況が悪く詳細不明であるが、口唇部に断面三角形の突帯を付けているように見える。刻みは認められない。また突帯が丸みを帯び、玉縁状に見える部分がある。111は5次2 T出土。シャープな作りの土器で、胎土に石英・雲母（金）等を含む。口唇内側をカットして「く」の字状に整形し、口唇外側に刻みを入れている。胴部には高い突帯を付け、口唇部と同様の刻みを入れている。内外ともナデ仕上げと思われる。口縁の傾斜がわかりにくい破片であって、直口になる可能性や、図より内傾する可能性もある。

G. 102～110は刻目突帯のある口縁で内傾しないと思われる資料である。102は6次6 T出土。丁寧な作りの土器である。口縁端に突帯を付け、ヘラきりによる刻みをつけている。内面は板削り、外面はナデ仕上げと思われる。103は6次6 T出土。口縁端より少し下に、つまんだような突帯を付け、棒状の工具で刻みを付けている。調整は不明。104は3次5 T出土。

105は5次5 T出土。口縁端より1～3 mm下に低い突帯を付け、刻みを入れている。表面が傷んでおり調整は不明。106は7次17 T出土。口唇部に丸みを帯びた突帯をつける。少なくとも残存部分には刻みがない。余分な粘土を付着したままにしているので、文様があるように見える図となっている。107は7次5 T出土。手捏ね風の作りで、口縁や胴部などの変異が大きい。胴部の刻みは確認できるが、口縁の刻みの有無は不明である。108は7次16 T出土。口唇部を外側へ伸ばし、刻みを入れている。口唇内側にも楕円形のくぼみが付けられているように見える。表面の剥落が著しい。109は3次6 T出土。直口のグループに入ると思われるが、勾玉状の断面を持つ工具の刺突によって刻みを付けていると思われる。110は7次1 T出土。口縁頂部を平坦に整形し、角に刻みを入れている。突帯をつけグループには入らないと思われる。

H. 112・113・114 如意形口縁と思われる破片が3点出土している。いずれも残存状態が悪い。112は7次3 T出土。口唇部が破損している為、刻みが不明瞭。113は5次5 T（遺構12）出土。菱形の刻みがあると思われる。114は6次6 T出土。全面剥落し、詳細不明。円形の刺突による刻みが施されていると思われる。

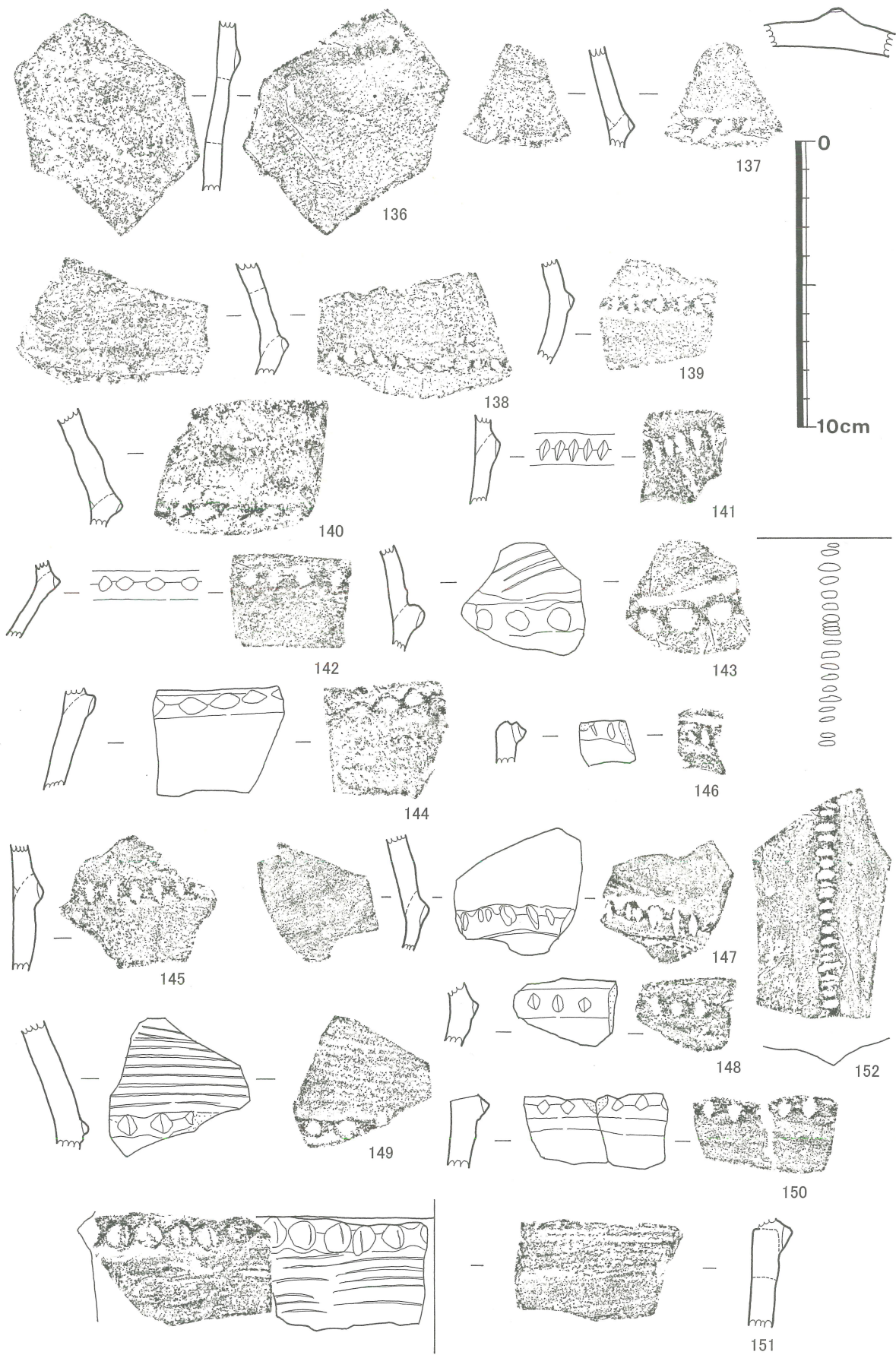
3) 刻目突帯のある甕類の胴部（第54～57図115～171）

胴部破片は、一部を除き口縁との対応関係を確定できない為、年次順・トレンチ番号順に列挙した。

115・116は3次1 T出土。両者とも磨耗しており、調整不明。117～121は3次6 T出土。117は全体の風化が著しく調整不明。刻みもよくわからないが、細かい刻みであったと思われる。胎土に雲母を含み、石英粒が目立つ。118は突帯が波打つような押さえをしている。調整は内外



第54图 D地点出土实测图6 (115~135) (S-1/2)



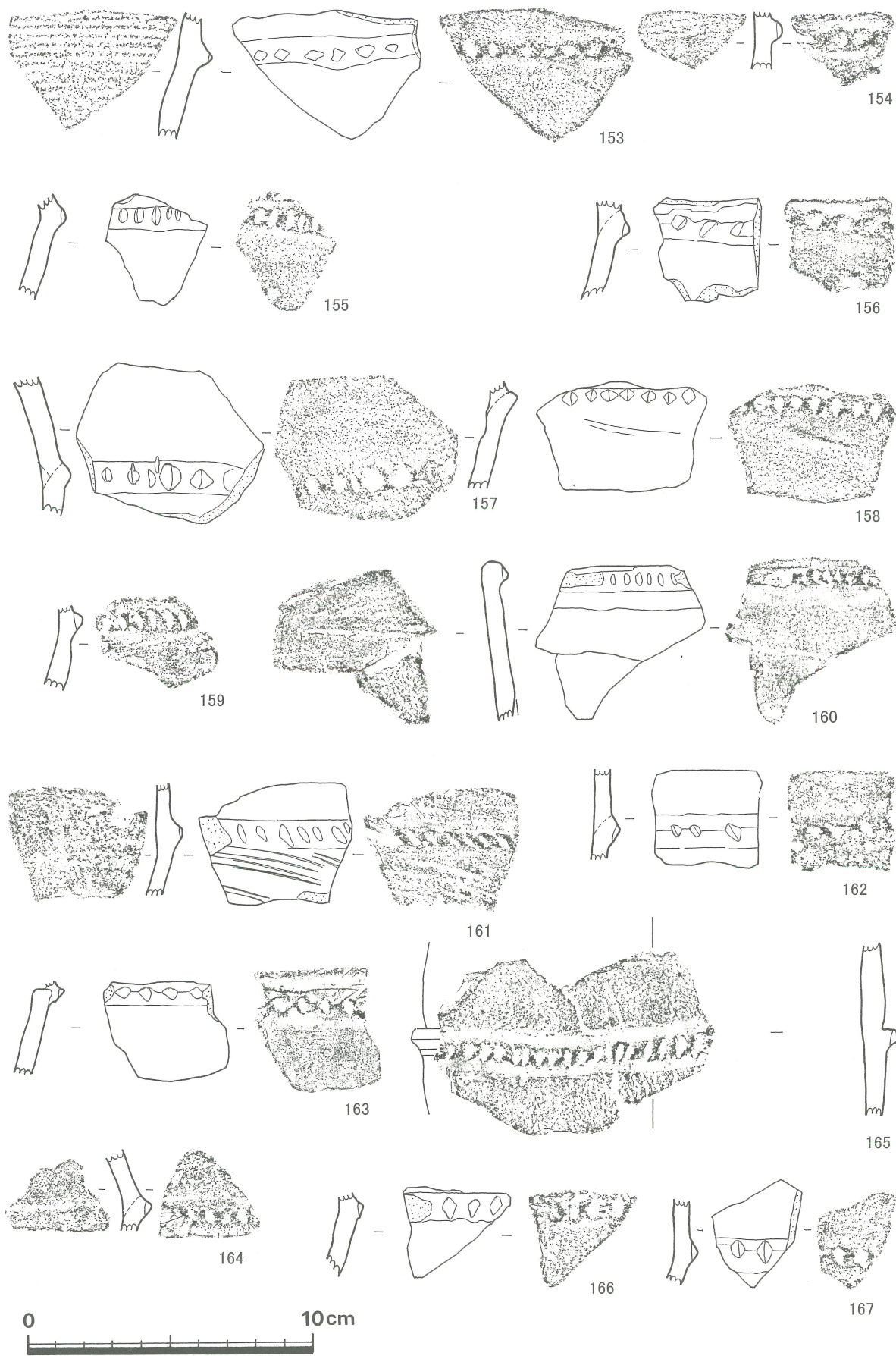
第55图 D地点出土土器实测图7 (136~152) (S-1/2)

とも条痕であったと思われる。119は内面に明瞭な条痕があり、外面には炭化物の付着が認められる。120は胎土に石英・雲母（金）を含む。口縁41・42の胴部にあたる可能性が高い。121の刻みは浅く曖昧である。胎土に石英を含む。120・121とも天地がわかりにくい破片である。122・123は5次2 T出土。122にはヘラきりによると思われる左下がりの刻みがある。123は外面には条痕が残り、内面はナデ消してある。刻みは深い。124は5次3 T出土。磨耗の為調整等不明。125は5次4 T、31号支石墓（S A 4）の棺内から出土。天地のわかりにくい破片である。棺内にあったためか保存が良い。焼成良く、硬質である。胎土に雲母（金）粉末を含む。調整は内外ともナデ仕上げ。刻みは丸い棒状の工具で右下がりに押えているように見える。126は5次5 T（遺構12ピット2）出土。丸棒によるやや右下がりの刻みと思われる。127は5次4 T出土。内外とも条痕の痕跡が残る。大き目の刻みであるが、浅い。

128～139は5次5 T出土。このトレンチからは作図可能な資料が多く出土している。128はやや右下がりの刻みを付ける。調整不明。129は細片のため詳細不明。ヘラきりによると思われる細長い刻目がある。130は天地不明。押えによる浅い刻みと思われる。131は屈曲しない胴部で、間隔の不規則な縦長の刻みを付けている。内外ともナデ仕上げと思われる。132は天地不明。押えによる細かな刻みが施されている。胎土に雲母粉末母を含む。133は縦長の右下がりの刻みを付ける。外面には条痕が認められる。胎土に雲母粉末を含む。134の刻みは右下がりの押さえによるものと思われる。135には細い丸棒を走らせたような刻みがある。136は突帯部分が損傷しており、刻みは不明。ナデによる調整と思われる。137は天地がわかりにくい破片である。押えによる刻みと思われる。138の刻みは浅くバラつきがある。外面はナデ仕上げと思われるが、内面には削りのような痕跡がある。139は天地不詳の破片で、ヘラきりによる刻みが施されている。140は5次6 T出土。押えたような横長の刻目である。調整不明。141は5次10 T出土。ヘラきりによる刻みがある。磨耗著しく調整不明。142は5次10 T出土。薄い作りで刻みは浅い。143は6次3 T出土。全体が風化しており調整不明。爪痕は見えないが指頭を用いて刻みを付けたものと思われる。144・145は6次4 T出土。144の刻みは指頭による可能性がある。通常の角閃石を含む胎土であるが黒曜石のような石粒が観察される。145は屈曲しない胴部でヘラきりによる刻みが施されている。調整はナデと推定される。

146～152は6次6 T出土。このトレンチからも多くの資料が出土している。146は小破片であるが、接着面が丸く見えている。ヘラきりによると思われる刻みがわずかに残る。147は天地のわかりにくい破片である。細い棒状の工具で刻みを入れている。胎土に雲母を含む。148は磨耗著しく詳細不明。149は天地不詳の破片である。外面に明瞭な条痕がある。150はヘラきりによると思われる刻みがある。調整はナデと推定される。151は接着面で破損している。外面は条痕をナデ消しており、内面には条痕が残る。太目の突帯を付け、指頭で刻みを入れている。刻みの中に爪痕が明瞭に残る。胴径約25cmに復元された。152は突帯を含めた径が36.6cmに復元された。細い丸棒状の工具で細かな刻みを入れている。胎土に雲母及び角閃石を含む。

153～156は7次1 T出土。153は内面に貝殻腹縁によると思われる明瞭な条痕がある。外面



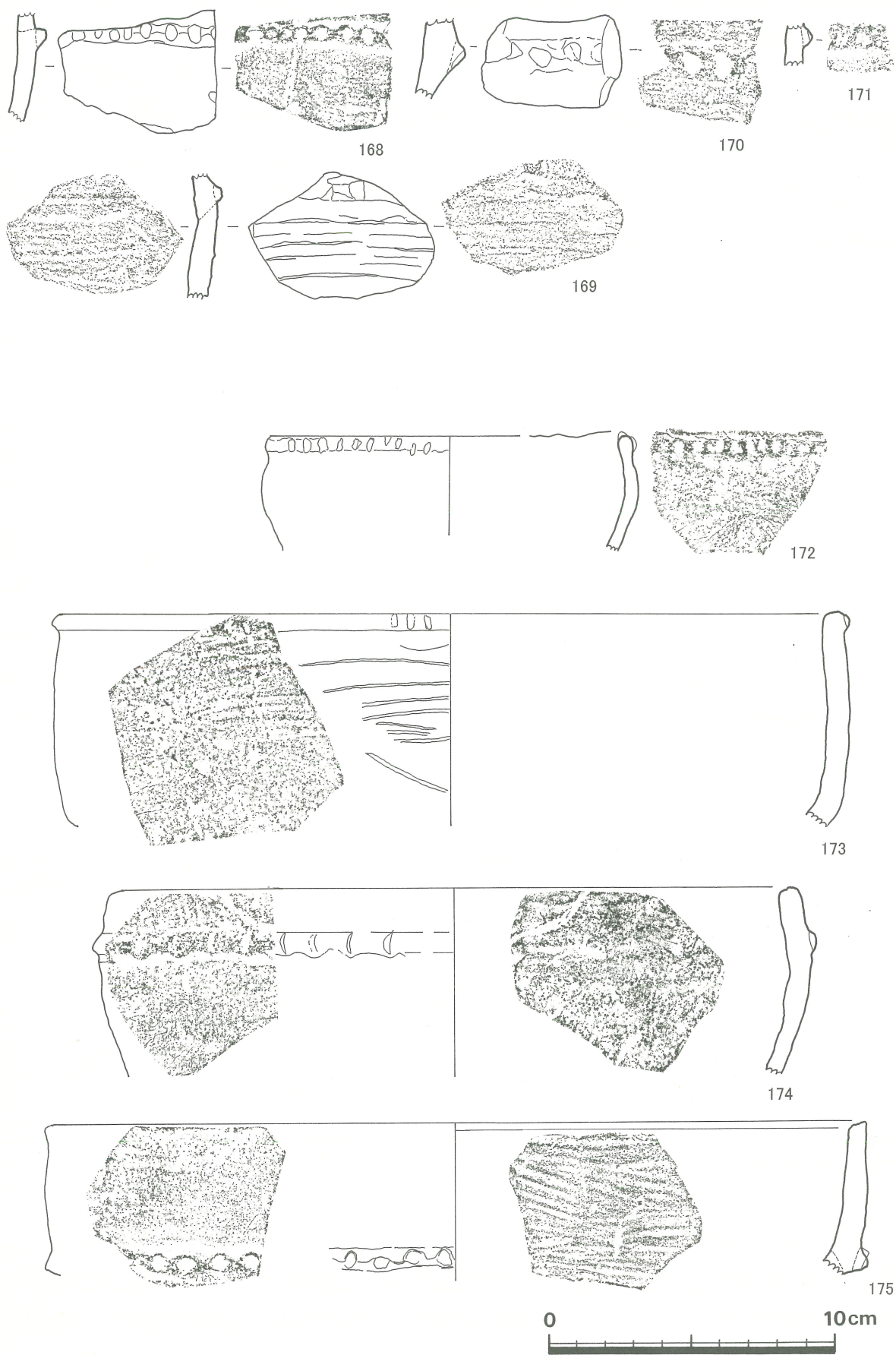
第56图 D地点出土土器实测图8 (153~167) (S-1/2)

の調整は不明。胎土に角閃石とともに黒曜石と思われる粒を含んでいる。154は内面に横方向の条痕が認められる。外面は傷んでおり、調整等不明。155はヘラきりによると思われる刻みがある。胎土に雲母（白・金）を含む。156の刻みは、角棒状の工具で押えたように見える。

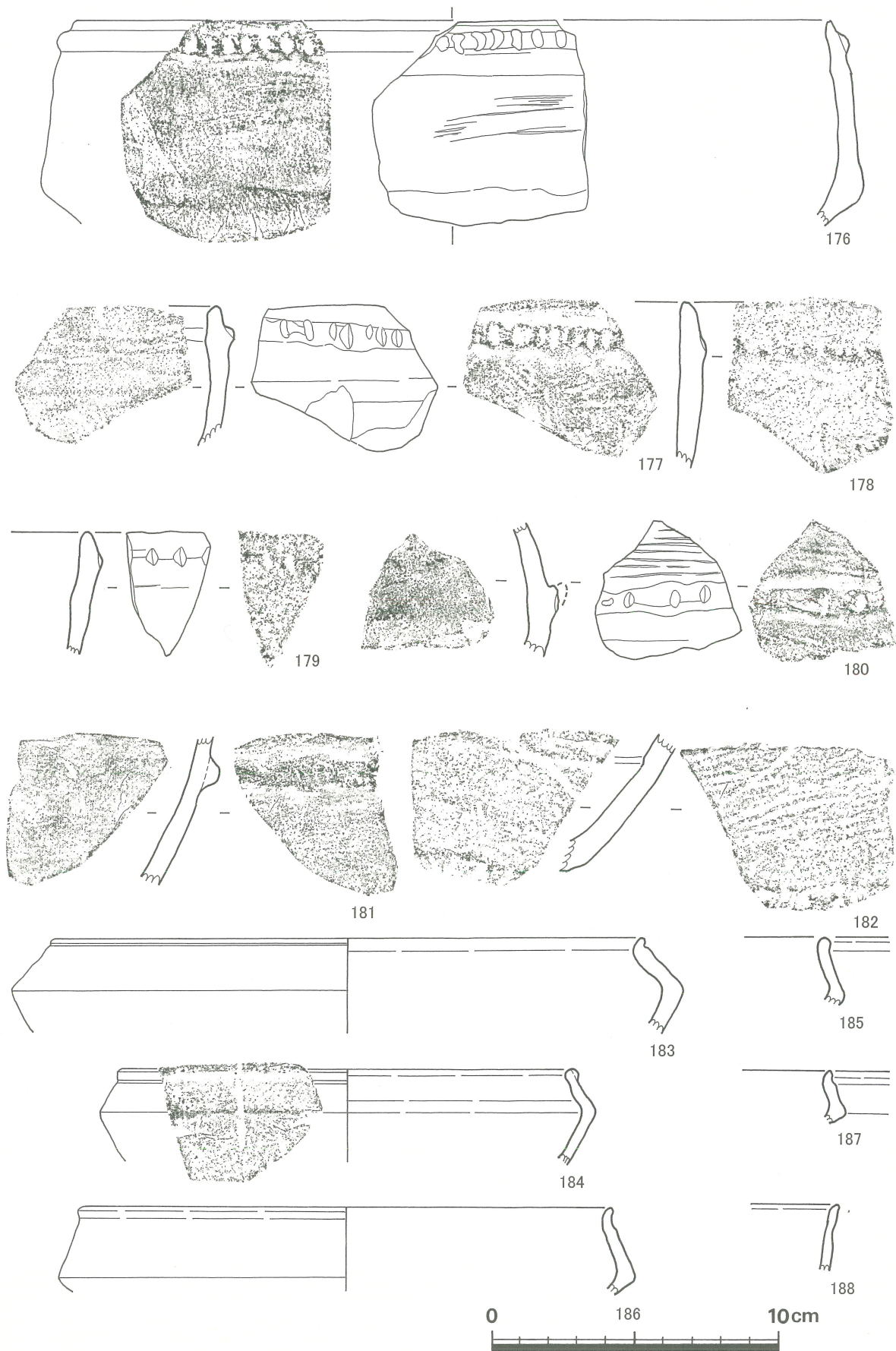
157～160は7次2 T出土。157の刻みは指頭によるものと思われる。調整はナデ仕上げと推定される。158は風化の少ない破片である。内外ともナデ仕上げ。ヘラきりによる刻みが付けられている。159は右側が広くなるようなヘラきり（片切り）による刻みが付けられている。160は内外とも板状工具によるケズリの後、ナデで表面を調整したと思われる。刻みはヘラきりによると思われる。161は7次9 T出土。右下がりの押えによる刻みが付けられている。外面には荒い条痕が残り、内面はナデ消しと思われる。胎土に雲母粉末を含む。162・163・164は7次10 T出土。162は全体の風化が進み、調整等不明。角棒状の工具を用いて刻みを付けていると思われる。胎土に雲母（金）を含む。163は接着面で剥がれた破片である。164の刻みは丸棒状の工具によると思われる。調整はナデ仕上げと思われる。胎土に雲母を含む。天地がわかりにくい。165は7次11 T出土。突帯を含む胴径は16.8cmに復元された。内外ともナデによる調整。丸棒状の工具で、斜め上方から突き刺して刻みを付けているように観察される。166は7次16 T出土。風化が進んでいる。丸棒状の工具を用いて刻んでいると思われる。胎土に雲母（金・白）を含む。167は天地不詳。風化著しく詳細不明。ヘラきりかと思われる刻みがある。168は7次17 T出土。丸棒状の工具で押えて、刻みを付けたものと思われる。破片の右下方に糊様の圧痕がかかっている。169は8次1 T出土。内面は条痕による調整、外面は幅0.9cm程度の削りが認められる。突帯部の残りはわずかであるが、指頭による刻みと推定される。170・171は8次2 T出土。170は破損が大きい。指頭による刻みと推定される。171は細片であり、詳細不明。外面に炭化物の付着が認められる。

4) 刻目突帯のある鉢類（第57・58図172～182、第59図189）

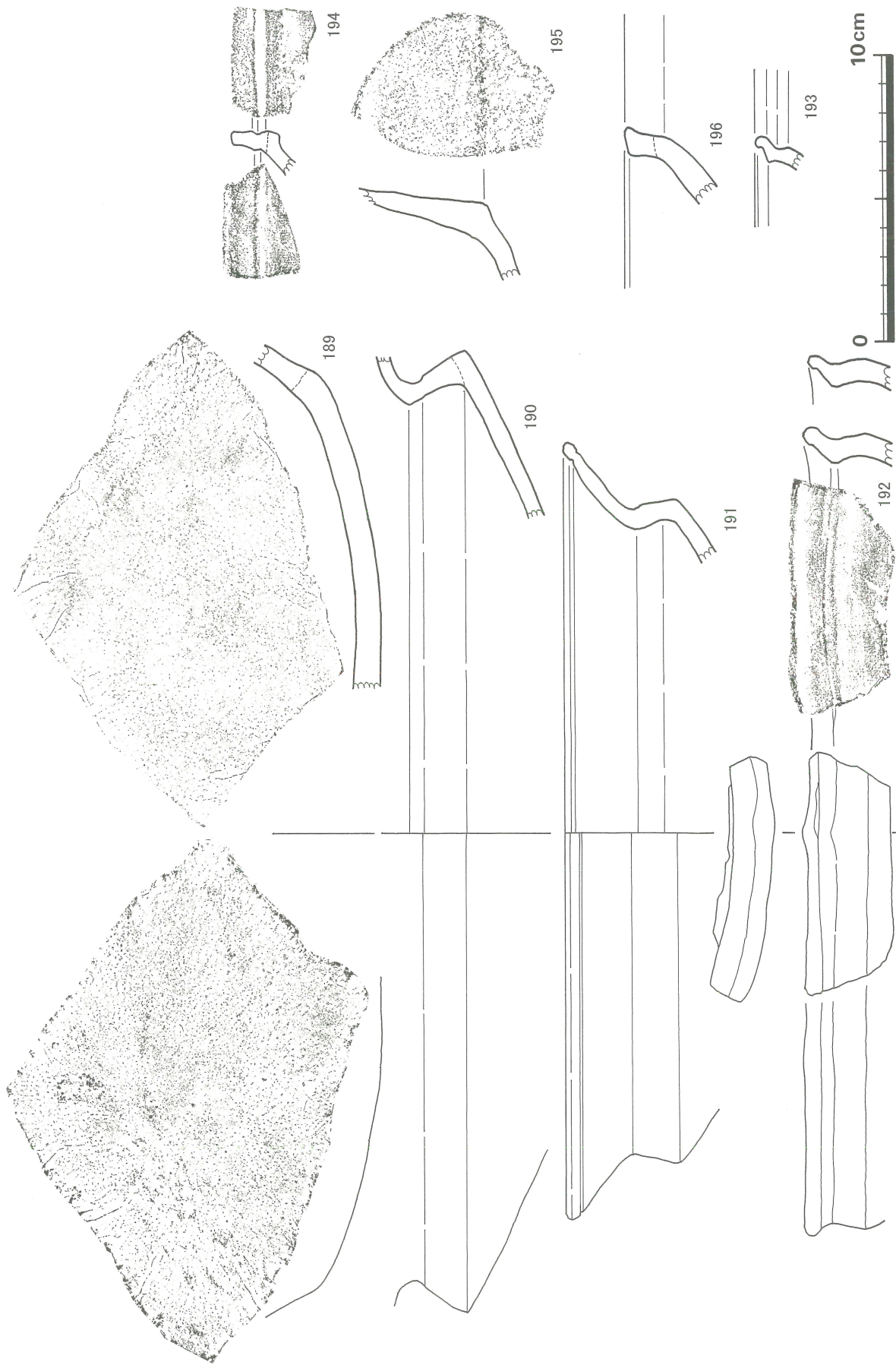
172は7次9 T出土。薄い作りで、口縁端ぎりぎりに突帯を付け、やや不規則な刻みを入れている。復元口径は12.7cm。内外ともナデ仕上げと思われる。大きさ以外は以下の大型の鉢類と共通する特徴を持つ。173～182は大型の器形で一部を除き胎土に多量の角閃石を含み、黒色～黒褐色を呈するものが多い。全体の形は概ね洗面器状になると思われる。173は6次6 T出土。口縁端に突帯を付けて細い刻みを入れていると思われるが、破損が大きく刻みの状況は不詳。外面に条痕が残るが、内面は平滑に仕上げられている。外面の所々に炭化物の付着が認められる。174は7次9 T出土。口縁頂部より2 cmほど下がった位置に突帯を付け、爪によると思われる刻みを付けている。調整は内外ともナデ仕上げ、外面には突帯より下に炭化物が付着している。175は7次9 T、38号支石墓（S B 4）出土。口縁端より5 cm下に突帯を付けている。ただし、突帯の変動は大きい。突帯が波打って見えるような刻みの付け方をしていると思われる。内面には明瞭な条痕が残るが、外面は条痕をナデ消している。176は7次2 T出土。復元口径は30.4cmほどである。口唇は尖っている。端部より4～5 mm下に突帯を付け、刻みを



第57图 D地点出土土器实测图9 (168~175) (S-1/2)



第58图 D地点出土土器实测图10 (176~188) (S-1/2)



第59图 D地点出土器表测图11 (189~196) (S-1/2)

入れている。刻みは、斜め上方からの刺突のように観察される。調整はナデ消しと思われる。177は7次9 T出土。突帯は右下がりに傾いて付けられている。刻みは棒状の工具で押えたものと思われる。調整は内外とも条痕をナデ消していると思われる。178は8次1 T出土。全体の風化が進み、詳細不明。口縁頂部より1.5cm下に低平な突帯を付け、浅い刻みを入れている。179は7次1 T出土。全体の風化著しく詳細不明。ヘラきりによる刻みと思われる。180は6次6 T出土。ゆがみのある破片である。突帯部分が破損しているが、指頭による刻みであったと思われる。外面は条痕による調整、内面は条痕をナデ消している。181は半円形の突帯を付けているが、刻みはない。内面はヘラミガキである。外面は風化のため研磨かどうか確認できない。ここにまとめた破片のうち、この1点だけ胎土に雲母を含み橙色であることから、全く別のタイプの土器とすべきかもしれない。このトレンチからは他に、図化していないが同一個体と思われる破片も出土している。182は6次6 T出土。底部付近の破片と思われる。外面は条痕が残り、内面は条痕をナデ消していると思われる。189はこれらの大型鉢の底部に当たる破片と思われるが、スペースの都合で掲載順をずらしている。7次9 T出土。外面はナデ、内面は磨いたように滑らかである。外面には炭化物が付着している。

5) 浅鉢類 (第58図183~188、第59・60図190~197)

当遺跡における浅鉢類の出土量は、甕形土器に比べて少ない。また、口縁部のみの破片の場合は高坏の口縁との地点別がつきにくく、両者が混在している可能性がある。183は6次6 T出土。やや大きすぎる復元かもしれない。精製の土器で、横方向に研磨してある。口唇部外側に、痕跡状の沈線が認められる。184は31号支石墓(SA4)調査時に棺外から出土。高坏の可能性もあると思われる。表面が剥落しており、研磨があったかどうか確認できない。口唇端を折り返して玉縁状に作っている。胎土に雲母粉末を含む。185は8次1 T出土。風化しており、調整不明。186は5次6 T排土からの採集品。187は5次6 T出土である。両者とも、全面剥落のため調整不明。188は3次6 T出土。内外ともナデ仕上げ。碗形になる可能性もある。190・191は6次6 T出土。190は口縁を欠くが大型の浅鉢と思われる破片である。色調は茶色であるが、全面的に研磨されたメリハリのある形の鉢である。外面には部分的に、炭化物(あるいは黒色塗料)の付着が認められる。191も全面研磨の精製土器であるが190に比べやや丸みがある。口縁内側に1条の沈線がある。色調は淡灰黒色である。192は6次1 T出土。形に歪があり、手捏ね風であるが、内外とも研磨されており、胎土も精良である。外面は褐色、内面は黒色である。193は5次1 T出土。内外とも研磨されている。外面は肌色、内面は灰黒色である。胎土に角閃石及び雲母粉末を含む。194は5次10 T(ピット1)出土。研磨による調整と思われる。195は7次18 T出土。一応浅鉢に分類したが、天地不詳であり、器形は確定できない。黒褐色を呈し、調整は研磨と推定され、黒色磨研土器と表現できる破片である。196は5次10 T出土。内外とも表面に傷みがあるが、ナデによる調整と思われる。197は6次4 T出土。浅鉢の一部と思われるが、詳細不明。

6) その他の鉢類 (第60図198~211)

浅鉢より深めの、碗形あるいはボウル状の器形になると推定される破片などをここに含めた。一部甕形やその他の器形になる口縁も含まれている可能性がある。

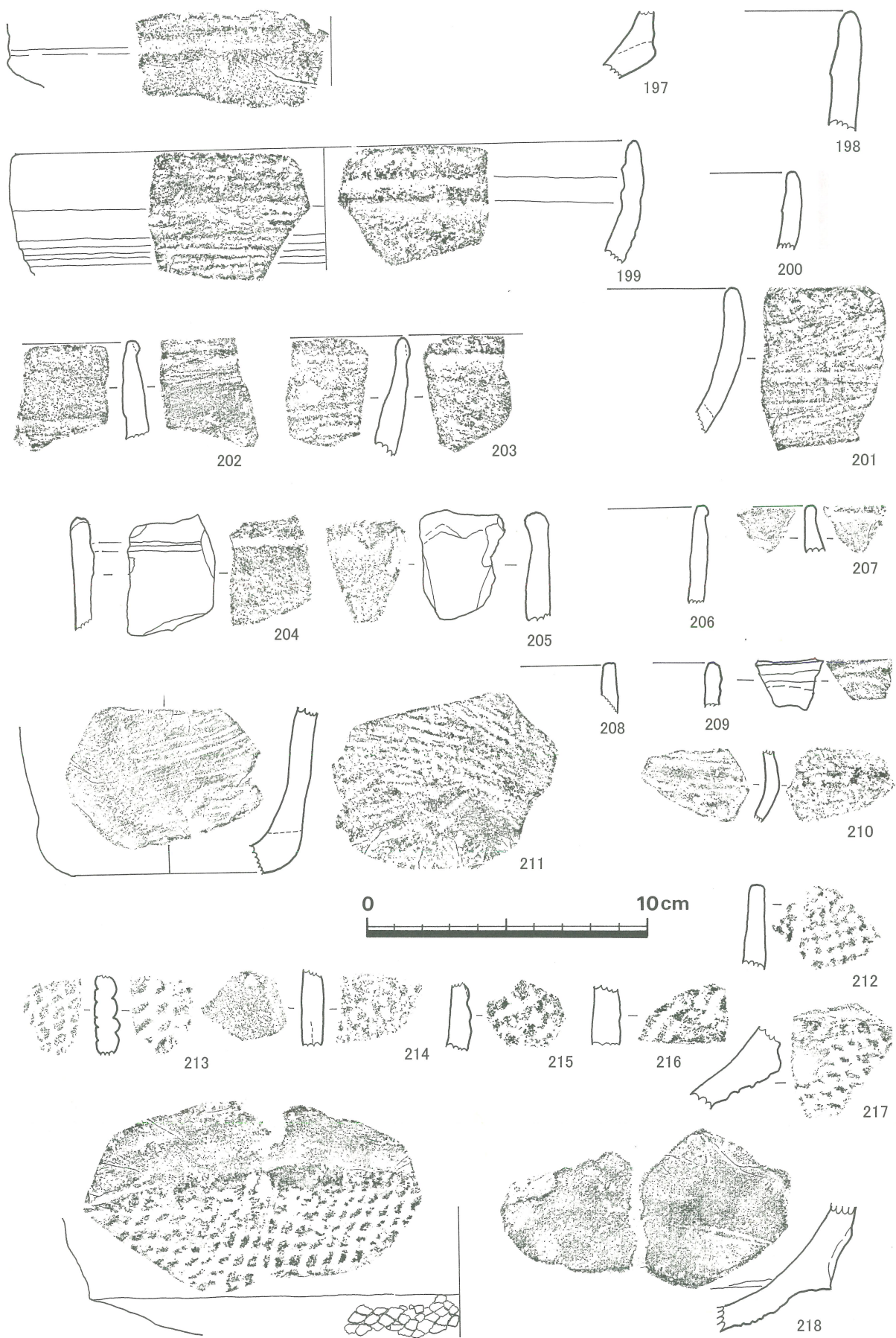
198は7次1 T出土。表面が風化し、調整不明。内面にヘラケズリによる整形が認められる。199・200・201は碗形になると思われる。199は6次1 T出土。荒い作りで、外面には貝殻腹縁によるとと思われる条痕がある。200は7次1 T出土。全面風化の為、調整不明。外面に丹塗りの痕跡がある。201は7次15 T出土。外面には荒い条痕状の調整痕がある。内面はナデ仕上げと思われる。202は6次6 T出土。鉢あるいは甕の口縁と思われる。口唇を外側へ折り返している。内面は段になった整形痕が残る。調整はナデと思われる。203も口唇を外側へ折り返し、肥厚させている。5次3 T出土。口唇部の厚みの変化が大きい。内面には条痕が認められるが外面の調整は不明。204は5次3 T出土。頂部に傾斜があり、リボン状突起等の基部に当たる破片と思われる。外面に1条の沈線がある。205・206は7次1 T出土。205は口唇を内側へ折り返した資料である。調整は内外ともナデと思われる。206は口唇を外側へ折り返している。調整はナデと推定される。207は7次4 T出土。口縁を玉縁状に作っている。研磨による仕上げと思われる。胎土に雲母粉末を含む。208は5次3 T出土。細片で器形も不明とすべき破片である。口縁頂部を平に作る。ごく小型の製品と思われる。209は外面に細い粘土紐を貼り付けて装飾を施していると思われる。7次1 T出土。210は3次6 T出土。器形不明の製品である。内面には横方向の条痕が見える。外面は傷んでおり断定できないが、刻みがあった可能性がある。211は3次6 T出土。平底の筒形(コップ形)の器形になるものと思われる。内外とも荒い条痕を残す。このタイプの破片は1点のみの出土である。

7) 組織痕資料 (第60図212~218)

組織痕のある土器は、7点出土しており、すべて網目である(注3)。212は7次9 T(S B 4)出土。口縁と思われる破片であるが、器形は不明。外面に網目痕がある。213・214はともに5次5 T出土。213は両面に網目の圧痕があり、外面の圧痕は深く、内面はつぶれている。214は片面のみに不明瞭な圧痕がある。2点とも胎土に雲母を含む。215・216は5次10 T出土。色調に違いがあるが同一個体かもしれない。両者とも外面に網目痕がある。217は7次1 T出土。次の218と同形と思われる。底面になる部分に網の圧痕がある。内面は平滑である。胎土に黒曜石粒を含む。218は6次6 T出土。胴部と底部の境目にははっきりした段があり、ここで胴部と底部を継いだものと思われる。底部にのみ網目の付く制作方法である。網目の中に結束したような部分があり、周りより少し凹んでいる。内面は平滑に仕上げられている。

8) 壺類 (第61図219~237)

当遺跡における壺形土器の出土は少なく、頸部・肩部を含めて19点を図示できたに過ぎない。219は埋葬に用いられた壺で51号支石墓(S B 23)出土。口頸部の大部分が残っているが、

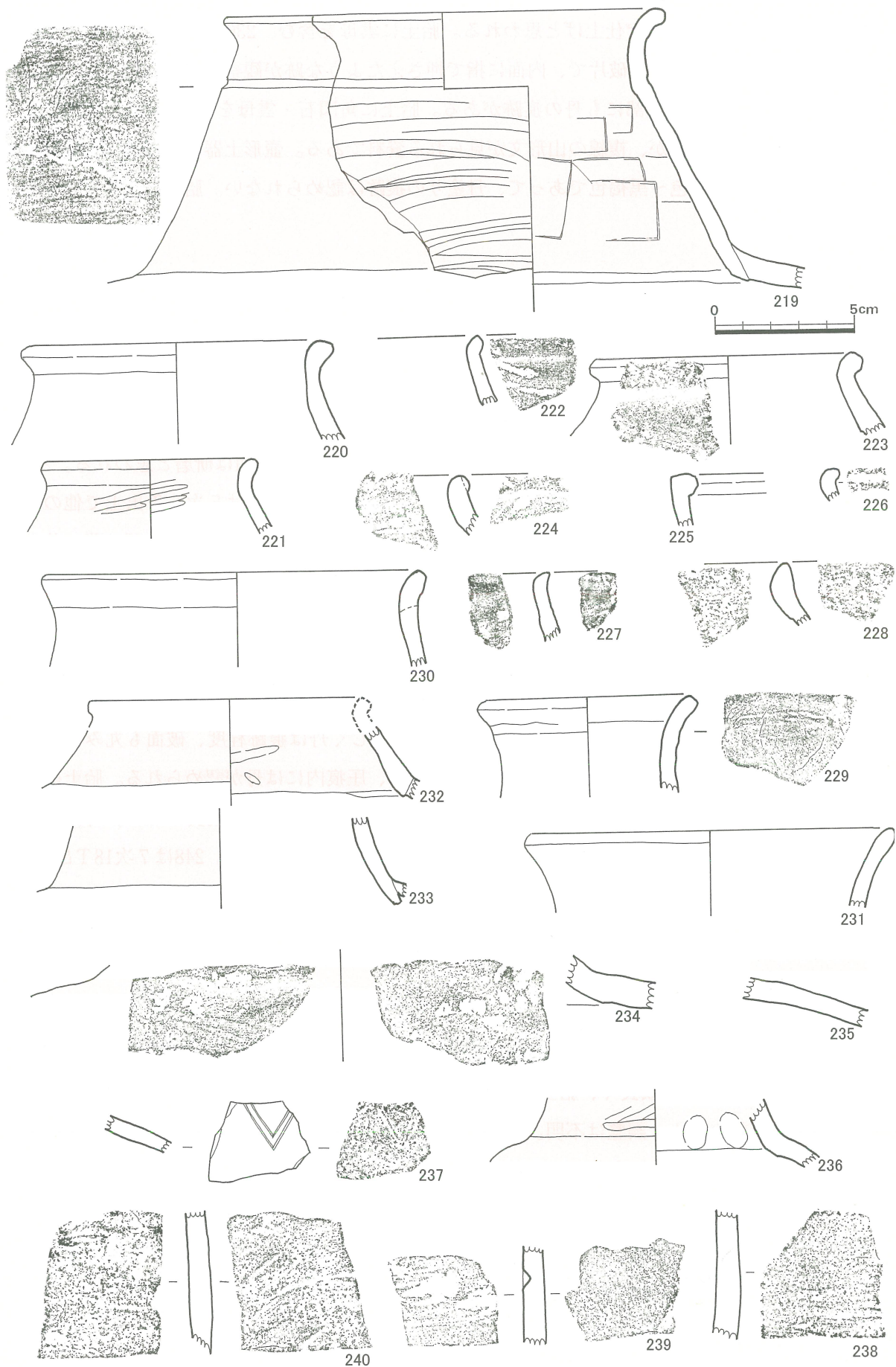


第60图 D地点出土土器实测图12 (197~218) (S-1/2)

肩部以下は欠失。口唇より約2.5cm下の外面に、浅い沈線を一条巡らす。研磨と丹塗りが施されている。研磨は横方向で、8cmくらいのストロークで弓なりに左右に工具を動かしている。外面は残存部全面に丹の塗布があり、内面は肩部との接合部まで塗布されている。内面の丹は外面より薄い。口縁部内外面はナデ仕上げと思われ、研磨の痕が見えない。肩部との接合部から沈線の裏側に当たる頸部内面には板状工具によると思われる横方向の削り痕があり、その上をさらにナデで仕上げていると思われる。ただし、内面の調整作業は胎土がかなり硬化してから行われたと思われ、凹凸が十分には除去されていない。焼成は良好で、丹の下の色調は黄灰色。外面の一部には黒斑が認められ、その反対面には黒色塗料が塗布されていると思われる。胎土は精良で、石英、雲母を含む。

220～231は壺形土器の口縁と思われる破片であり、このうち222・225・229の3点が角閃石を含む胎土であり、他の8点は雲母を含む胎土である。221は雲母、角閃石の両方を含む。220は6次6 T出土。口縁の内側に破損がある。風化の為わかりにくいだが、調整は研磨であったと推定される。丹塗りは確認できない。肌色を呈し、胎土に石英粒・雲母微粉末を含む。221は8次2 T出土。精製の土器で、研磨があったと推定される。胎土に雲母・角閃石・石英等を含む。口縁内側から外面にかけて丹が認められる。222は6次6 T出土。精製の土器で、外面に横方向の研磨痕が残る。内面は傷んでおり調整不明。丹塗りは確認できない。胎土に角閃石を含む。223は7次9 T出土。傾斜角度がわかりにくい資料である。調整は研磨と推定される。胎土に雲母粉末を含む。224は5次5 T出土。胎土は精良であるが調整は不明。胎土に雲母粉末を含む。内面に黒色塗料(?)の痕跡がある。225は8次2 T出土。破損面が多く、調整、丹塗りの有無等不明。外面に炭化物が付着している。胎土に角閃石を含む。226は6次1 T出土。細片であり、調整、丹塗りの有無等不明。胎土に雲母(金)を含む。227は7次10 T出土。精製された胎土で、雲母粉末を含む以外他の砂粒は見えない。灰茶色を呈し、焼成良く、硬質である。丹塗りは確認できない。228は7次5 T出土。細片であって、傾き・調整等不明。赤燈色で、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。229は6次5 T出土。外面に浅い痕跡状の沈線(?)がある。外面は研磨と思われ、内面はナデ仕上げと推定される。丹は確認できない。角閃石を含む胎土である。230は5次5 T出土。全体の風化が著しく、調整、丹塗りに等不明。胎土に多量の石英粒・雲母(金・白)を含む。231は6次4 T出土。全面剥落のため、調整、丹塗りの有無等不明。赤燈色で砂粒多く、雲母を含む。

232は壺の頸部と思われる破片で6次6 T出土。内外面とも丹塗りにある。外面は研磨されており、内面には粘土の継ぎ目が見える。胎土に角閃石・石英・雲母を含む。233も頸部と思われる破片で3次6 T出土。内面の接合状態がそのまま残っている。外面には研磨とともに丹塗りが施され、内面はナデ調整と思われる。角閃石を含む胎土で、暗灰茶色を呈している。234は6次6 T出土。頸部と肩部との接合部と思われる破片である。外面には研磨の後、丹が塗られている。内面は平滑であって、微量の丹が付着している。内面の調整はナデと推定される。胎土に雲母を含む。235は肩部と推定される破片で、外面には丹が塗られており、調整は研磨



第61图 D地点出土土器实测图13 (219~240) (S-1/2)

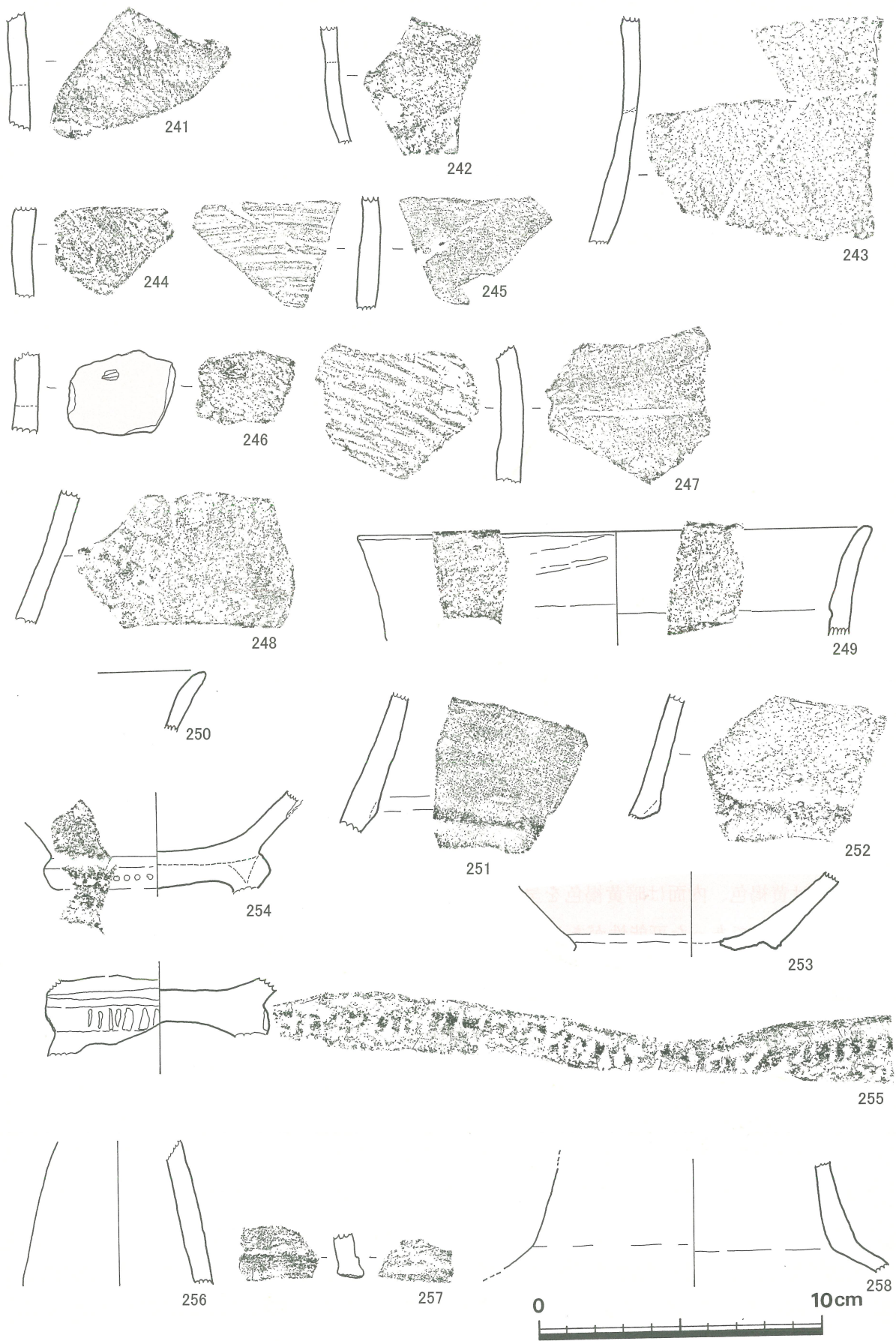
と推定される。内面はナデ仕上げと思われる。胎土に雲母を含む。236は7次1 T出土。頸部と肩部の接合部と思われる破片で、内面に指で押さえたような跡が観察される。外面には丹が施されており、内面の上部にも丹の痕跡がある。胎土に角閃石・雲母を含む。237は3次6 T出土で、小破片であるが、複線の山形文が見られる資料である。壺形土器の肩部付近と思われる。調整は不明。褐色～黒褐色であって、丹塗りの痕跡は認められない。胎土に角閃石・雲母を含む。

9) 丹塗り資料 (第61・62図238～248)

ここには丹塗りの目立つ破片をまとめて提示した。すべて外面のみの丹塗りであり、大部分が壺形土器の破片と思われる。258を除き、胎土に雲母を含む。238は5次5 T (遺構12) 出土。図の下方は接着面で斜めに割れている。風化著しく、丹の残りは悪い。239は5次5 T出土。外面は研磨。内面は痛みがあり、調整不明。240は5次3 T出土。外面は研磨と思われる。241は5次5 T出土。粘土の境目が観察される。内外とも調整不明。242は5次5 T出土で他の破片に比べやや薄い作りである。外面は傷みがあり、丹は所々に付着している。内面は荒い仕上げで、脚部の可能性もある。243は6次2 T出土。外面に丹が塗られている。内面の風化が著しい。244は6次4 T出土。外面に板状工具(?)によるケズリ痕があり、その上に丹が塗られている。内面は風化のため、調整不明。砂粒多く、角閃石を含む胎土である。245・246は7次1 T出土。245は精製された胎土で砂粒は少ない。外面は研磨の後、丹を塗り、内面は貝殻復縁によるとと思われる条痕が明瞭に残る。246は風化著しく丹は痕跡程度、破面も丸みを帯びている。内外とも調整不明。外面に糊様の圧痕があり、圧痕内には丹が認められる。胎土に雲母・角閃石を含む。247は7次2 T出土。精製の土器であり、焼成良く硬質である。外面は研磨の後、丹塗り。内面には貝殻復縁によるとと思われる条痕が明瞭に残る。248は7次18 T出土。風化著しく、丹は外面に一部が残るのみである。外面の調整は部分的に観察でき、縦方向の研磨と思われる。

10) 高坏 (第62図249～258)

細片化した場合、高坏の口縁と鉢類の口縁との地点別はつきにくいだが、口縁2点を掲載した。249は7次18 T出土。焼成良く、胎土も精良であり、研磨による調整と推定される。250は5次3 T出土。風化のため、調整は不明。251は6次6 T出土。坏部と思われる破片で、外面に段が設けてある。調整はナデ仕上げと思われる。252は天地不詳であるが、坏部として作図した。図の下方がかなり薄く作られており、疑問もある。ナデ仕上げと推定される。253は6次4 T出土。精製の土器で、研磨による仕上げと推定される。内面外面とも丹が塗られている。胎土に雲母および角閃石を含む。254・255はともに坏部と脚部との接合部に突帯をつけるタイプであるが、上部が甕形になる場合もあるので高坏の部分と断定はできない。なお2点とも風化損傷が著しい。254は6次6 T出土。突帯の大部分が剥落しているが、残存部には刺突による装



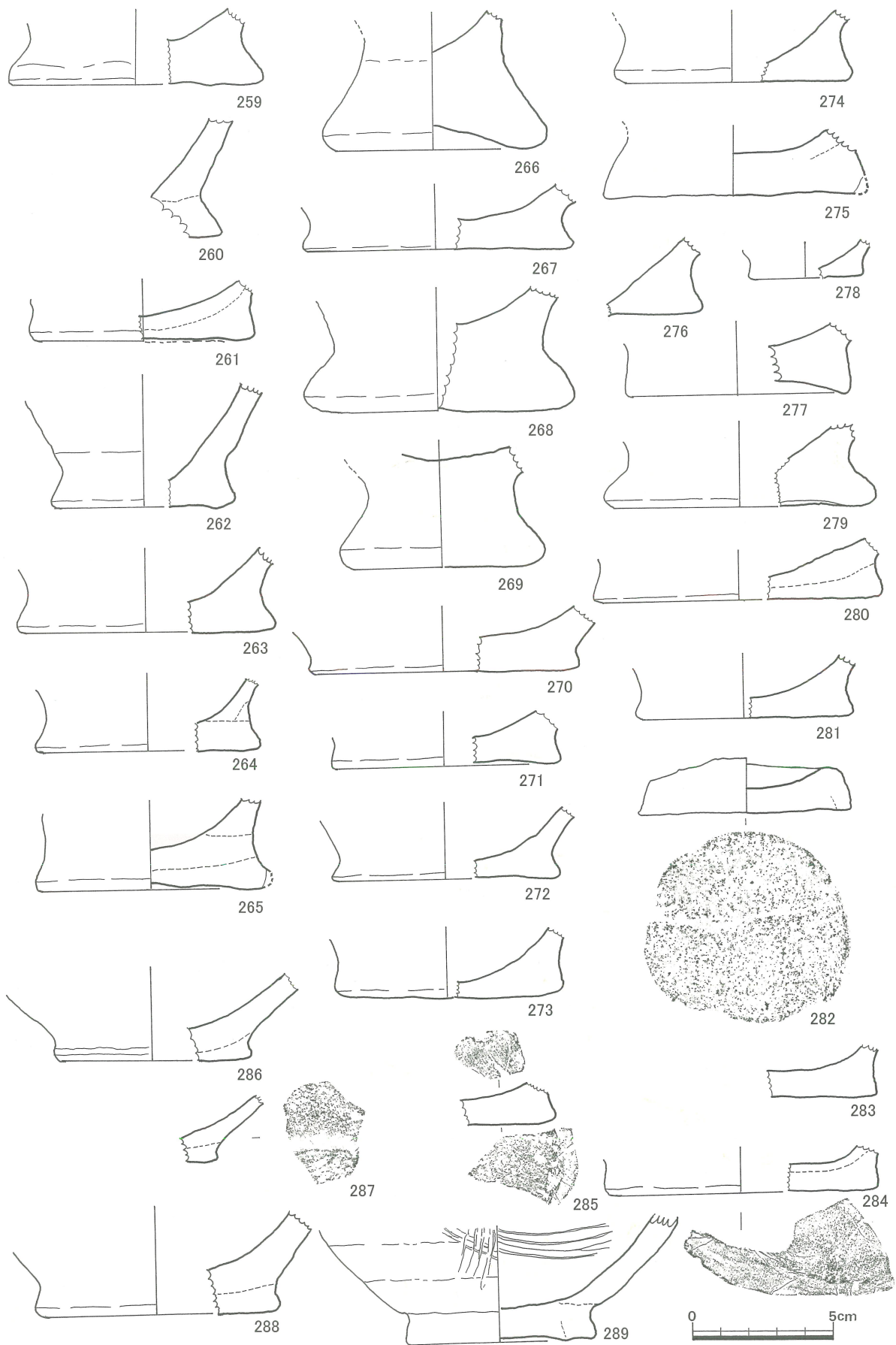
第62图 D地点出土土器实测图14 (241~258) (S-1/2)

飾が施されている。硬質に焼けており、2次被熱を受けたかのような印象がある。坏部内面には、わずかに炭化物の付着が認められる。胎土に雲母および角閃石を含む。255は7次9 T出土。突帯部は、破損はあるもののほぼ全周が残り、ヘラ刻みによると思われる装飾が認められる。焼成悪く柔らかい。胎土に角閃石を含む。256は脚部の破片と思われるが、上部がどのような形状になるのか、良くわからない土器である。表面が剥落しており、調整は不明。胎土に雲母および角閃石を含む。257は6次4 T出土。脚端と思われる破片である。細片のため調整等不明。角閃石を含む胎土である。258は5次2 T出土。上下を欠くので確定はできないが、高坏の脚部として作図した。下方で外開きになる形状である。風化、損傷があり調整等不明。胎土に雲母および角閃石を含む。

11) 底部資料 (第63～64図259～299)

259～282は甕類の底部と思われる資料で、調査年度・トレンチ番号順に掲載している。ほとんどが角閃石を含む胎土であるので、雲母を含む場合のみその旨を記している。

259は3次6 T出土。外面は赤橙色、内面は黒色である。260は5次4 T出土。焼成良く、全体が赤橙色を呈する。胎土に雲母を含む。261～263は5次5 T出土。261は表面の剥落著しく、詳細不明。黄褐色を呈する。262は全体が赤橙色であり、胎土に雲母を含む。残存部分の調整はナデ、胴部との接合部外面にはヘラで掻き取ったような凹みがある。263は褐色を呈する。調整不明。264は5次6 T出土。残存部分はナデ調整。外面は赤橙色、内面は黄褐色を呈する。265は5次7 T出土。砂粒を多量に含んだ粗い作りである。風化著しく調整不明。底部内面に丹塗りの時のボタが僅かに認められる。266は6次1 T出土。外面は赤橙色、内面は黄褐色を呈する。調整不明。267～271は6次4 T出土。267は風化著しく調整不明。外面は赤橙色、内面は黄褐色を呈する。268の調整はナデと推定される。外面は赤橙色、内面は褐色である。269の外面は黄褐色、内面は暗黄褐色を呈する。調整はナデと思われる。270は胎土に砂粒が少なく、精製土器であった可能性がある。外面の色調は肌色に近い淡赤橙色、内面は灰黒色で炭化物の付着が認められる。271は風化しており調整不明。外面は赤橙色、内面は黄褐色である。272・273は6次5 T出土。ともに復元径は8.0cmである。272は風化著しく、調整等不明。外面は淡赤橙色、内面は暗灰褐色を呈する。273の調整はナデと思われる。非常に砂粒の多い胎土でザラついている。外面は黒褐色、内面は褐色である。274・275・276は7次1 T出土。274は風化著しく、調整等不明。全体が黄褐色である。275は約1/2が残る破片であるが、風化著しく、調整等不明。色調は暗い薄茶色である。276は小破片である。残存部分の調整はナデ。芯まで赤橙色に焼けている。中心付近の厚みは5mm程になると推定される。胎土に雲母が含まれている。277は7次5 T出土。全体の風化が進み、調整等不明。278は7次10 T出土。かなり小型の製品であって、あるいは壺型土器の底部かもしれない。風化が進み、調整等不明。胎土に雲母、あるいは結晶片岩(?)を含んでいる。色調は赤橙色。279・280は7次17 T出土。279は破損と風化によって、調整等不明。黄褐色である。280は復元径が10.2cmあり、当遺跡出土の



第63图 D地点出土土器实测图15 (259~289) (S-1/2)

底部の中では、最も大型であると思われる。外面は赤橙色、内面は紫褐色を呈する。281は7次18T出土。全体が風化しており、調整等不明。外側面は黒褐色、底面は、内面は黄褐色～黒褐色であり色調にムラがある。282は8次6T出土。底面の全周が残る資料であるが、風化のため調整等不明。砂を固めたような胎土で、ザラザラしている。外面は濃い赤橙色、内面は黄褐色を呈する。283・284・285は研磨のある底部であって、鉢類の底部になる可能性がある。283は7次1T出土。精製の土器で、底面も平滑である。外面は淡茶褐色、内面は灰黒色であり、外面の調整は研磨と思われる。内面は風化のため不明。砂粒の少ない角閃石を含む胎土である。284は7次17T出土。外面は研磨が施され、内面はナデ調整と思われる。黒色を呈し、焼成良く硬質である。砂粒の少ない精良な胎土で、雲母粉末を含んでいる。285は8次2T出土。黒色で、砂粒の少ない精良な胎土であり、角閃石を含むが、微量の雲母も含まれている可能性がある。外面・内面ともに研磨が施されている。

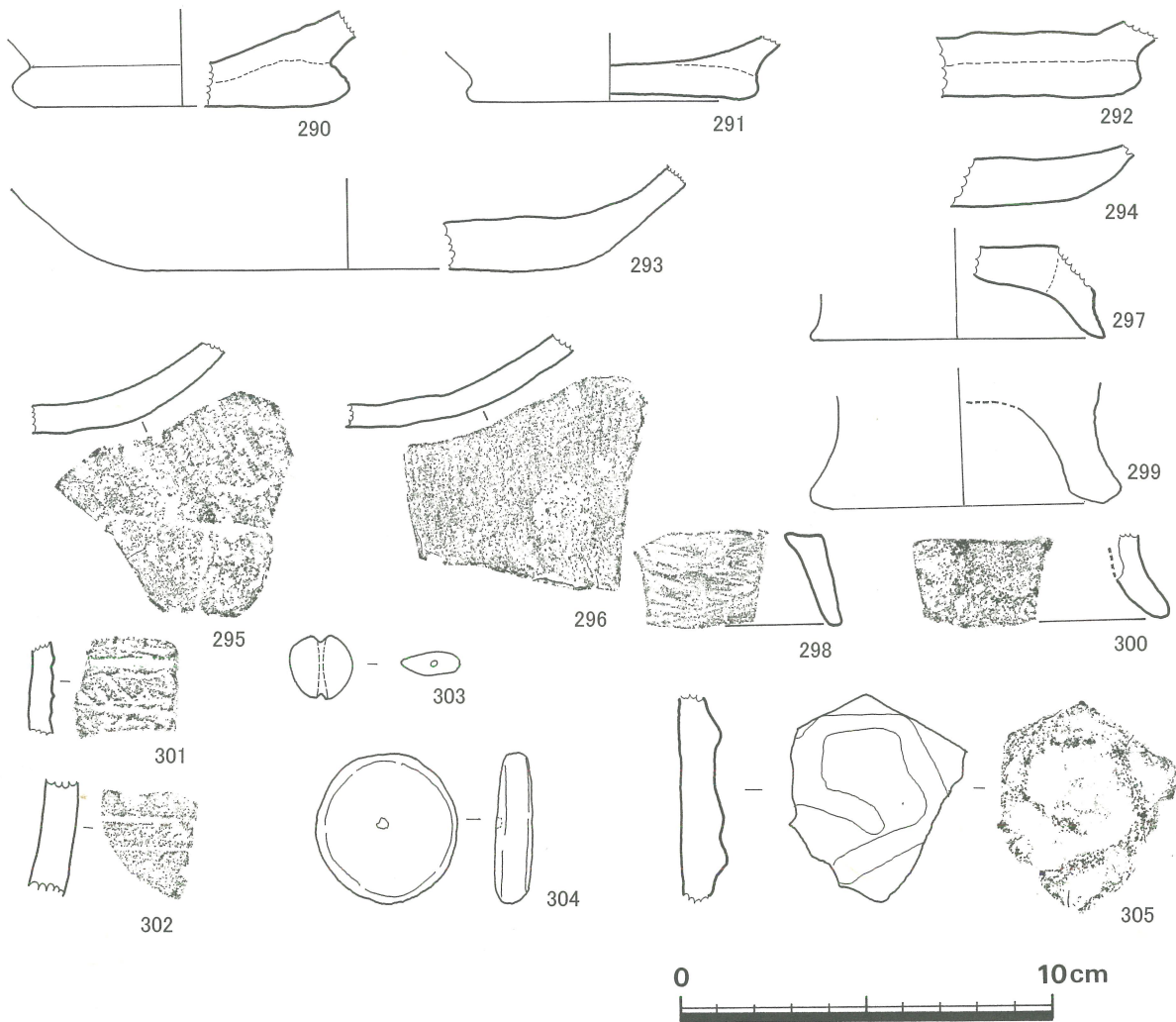
286～293は壺形土器の底部と思われる資料である。286は5次5T出土。内外ともナデ仕上げと思われる。胎土は粗い。287は6次5T出土。外面は研磨、内面はナデ仕上げである。角閃石を含む胎土である。288は7次2T出土。調整はナデと推定される。289は7次14T出土。外表面が剥落しており、調整の観察は困難であるが、縦方向の研磨と推定される。底面は平滑である。内面はナデ仕上げの調整と思われる。290は5次3T出土。円盤状の底部に胴部を付けた形状をしている。調整不明。291は7次9T出土。調整はヘラミガキと推定され、精製土器と思われる。焼成良く、胎土に砂粒がほとんど見られない。内面に黒色塗料状の物質が付着している。292は風化激しく、石英粒等が表面に浮き出ている。調整等不明。大型の器形と思われる。5次4TのSA-8付近からの出土。293は6次4T出土。丸底の底部である。大型の壺形土器の底部に当たると推定される。外面の調整は横方向の研磨で、内面は剥落のため不明。砂粒の多い胎土で、雲母が含まれている。

294・295は薄い板状の丸みを帯びた底部であって、大型の鉢類の底部に相当するかもしれない。2点とも6次6T出土。294は接地部より上方には横方向の条痕が認められる。胎土に角閃石を含む。295は胎土に雲母・石英粒を含み、294とは明らかに別個体である。295の外面は条痕を施した後、ナデ消したように観察される。内面はナデ調整、焼成良く、硬質である。

296～299は脚台状の底部である。296は5次5T出土。損傷大きく、詳細不明。297は接着面で剥がれている。外面はナデ調整と思われ、内面には条痕が残る。5次3T出土。298は6次6T出土。299は6次4T出土。風化・損傷があり、調整等不明。口縁の可能性もあると思われる。雲母を含む胎土である。

12) その他資料 (第64図300～305)

300～304は以上の分類に入らなかった資料である。300は部位不明の資料で胎土に雲母を含む。301はヘラきりによる文様が施されていると思われる土器の断片である。302は浅い沈線が2条見える。2点とも胎土に角閃石を含む。303は7次10T出土。孔が貫通しており、土製玉



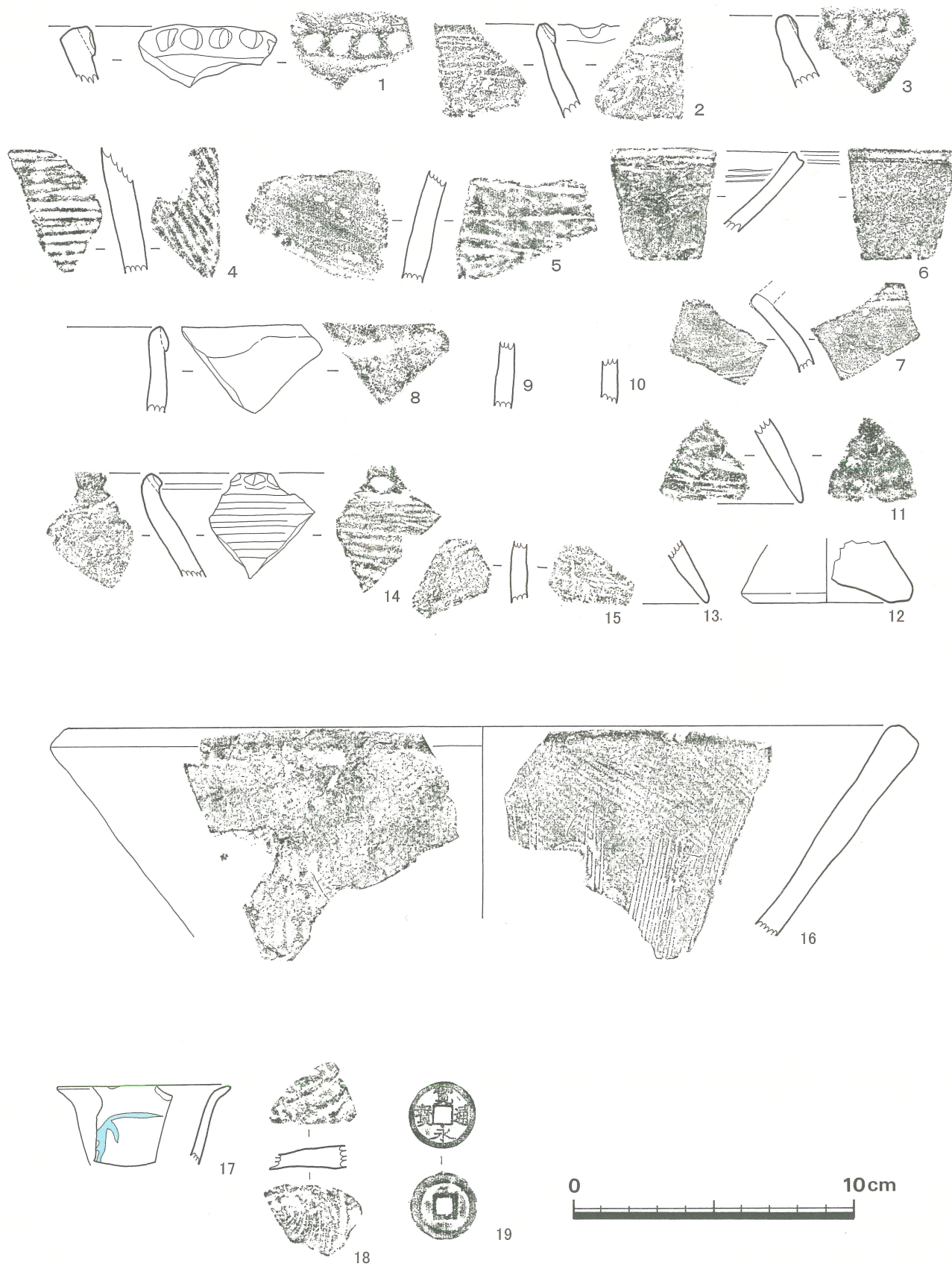
第64図 D地点出土土器実測図16 (290~305) (S-1/2)

と思われる資料である。焼成良く黄褐色で、片側に面積の2/3程の黒斑がある。胎土に角閃石を含む。出土時には木根が貫通している。304は6次4T出土。土器片を加工して円盤状にした土製品で、最大径は4.0cm、最小径は3.8cmである。紡錘車の未製品かと思われ、中央に穿孔の跡がわずかに残る。外面は赤橙色、内面は灰褐色で胎土に角閃石を含む。305は粘土紐を貼り付けて、角張った「の」の字状の文様にした土器片である。風化が進み調整は不明。砂粒の多い胎土で、角閃石を含む。外面は赤褐色、内面は褐色である。晩期前半の土器かとも思われる。

E地点 (第65図、第19表、図版72)

近世の資料2点、縄文晩期の土器片64点が出土している。晩期の土器13点を図示したが、2点を除き1次8Tからの出土である。

1~13は1次8T出土14、15が3次30T、52号支石墓(SB12)出土。1は小破片であるが、内傾する甕の口縁部とおもわれ、口縁端に太目の突帯を付け、指頭による刻みを施している。刻みの中には明瞭な爪痕が認められる。角閃石を含む粗い胎土で、砂粒の密度が高い。2も口



第65図 E地点出土土器及び中・近世出土遺物実測図 (S-1/2)

縁端に突帯を付け、刻みを入れているが残存部分が少なく、刻み方は判断できない。内外とも条痕が残るが、外面の条痕は不明瞭である。胎土粗く砂分に富む。3も2と同様の破片であるが条痕の有無は不明。浅い左下がりの刻みを付けている。4は胴部の破片で内外とも条痕が明瞭に残る。5は外面に条痕が残り、内面は丁寧に消されている。6は全体の形を想定できないが、鉢の口縁のように図化した。あるいは高坏等の脚部かもしれない。全面的に研磨されているが、内側はやや荒い。黄褐色である。7も内外ともに研磨されており、上部は接着面で剥がれている。灰褐色。8は粗製の鉢と思われ、口唇部を外側へ垂れるように折り返している。9、10は外面に丹塗りが残る小破片で器形は不明。9は胎土に雲母（金雲母）粉末を含み、10は角閃石を含んでいる。11は口縁の可能性もあるが、脚端として図化した。内面に条痕が残る。12は底部で残りは悪いが、径6.2cmに復元できる。13は8 T出土と思われるが確定できない。脚端と思われる小破片で肌色の丹塗り土器に似た胎土である。表面は平滑。14は口縁端に突帯を付け、刻みを入れている。外面の条痕は明瞭であるが、内面はナデ消していると思われる。胎土に角閃石及び雲母粉末を含む。15は3次30T、52号支石墓（S B 12）出土。焼成良く、硬質。淡橙色で内外ともナデ仕上げと思われる。器種・部位不明。

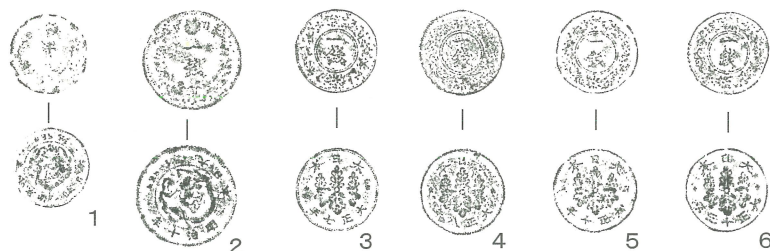
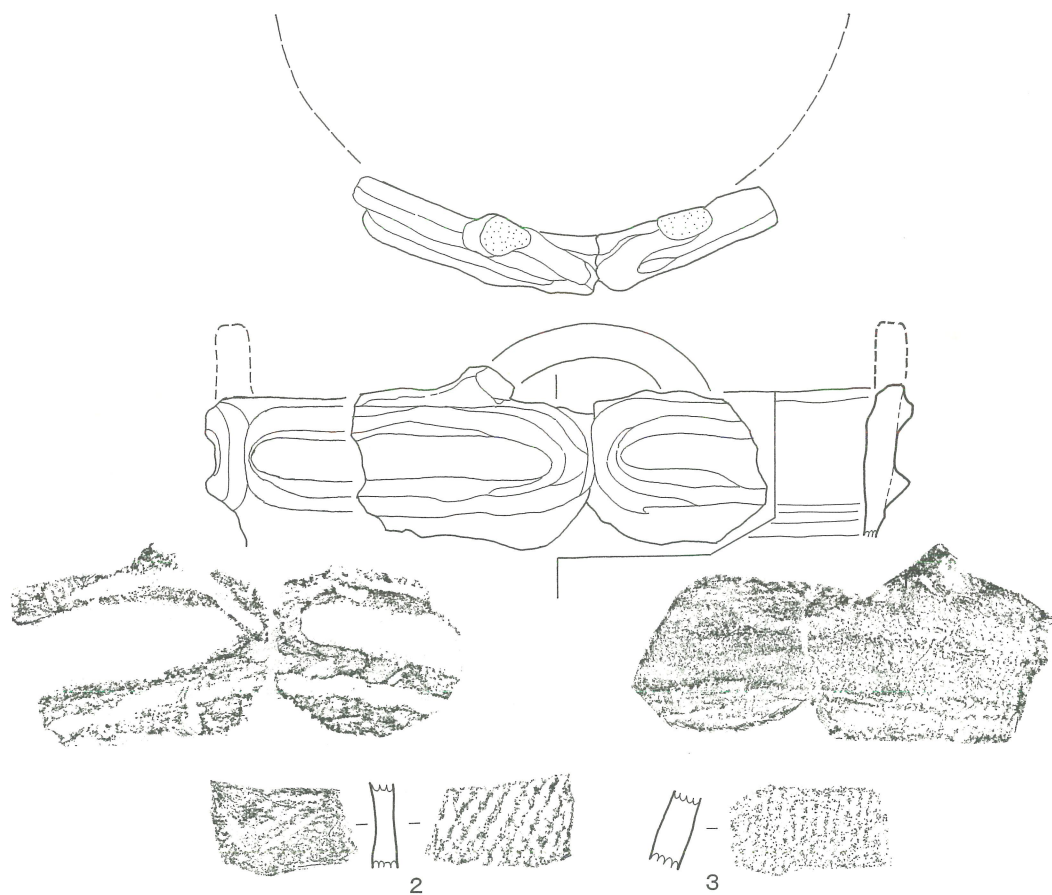
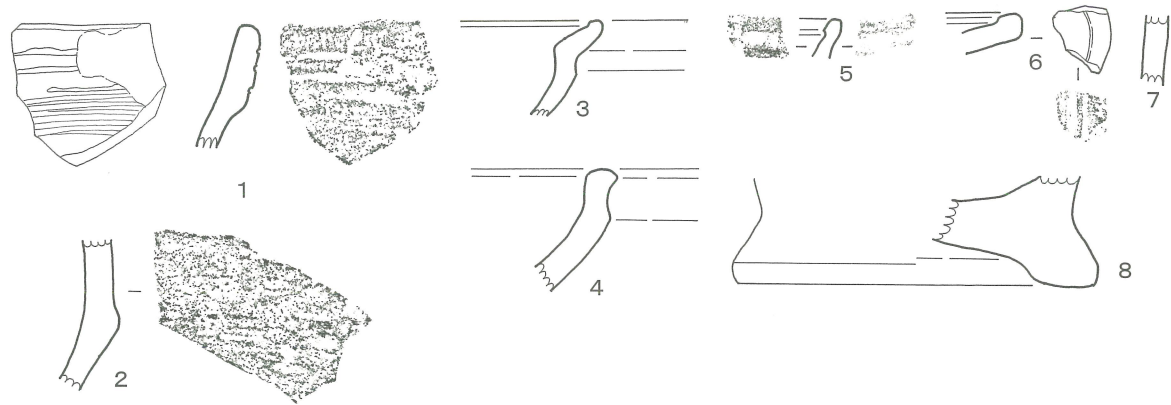
F 地点（第66図、第20表、図版72）

土器破片54点が出土しており、そのほとんどが縄文晩期前半のものと思われる。

1は甕（深鉢）形土器の口縁部と思われる。外面は条痕による調整。内面はナデ消しと判断される。4次調査6 T出土。2は胴屈曲部の破片で、外面に条痕の痕跡がある。4次10T出土。3は精製浅鉢の口縁と思われ、内外とも横方向に研磨されている。橙色を呈する。4次6 T出土。4は4次10T出土。鉢あるいは高坏の口縁と思われる。表面の剥落が著しい為、研磨されていたかどうか不明。5は細片であるが精製磨研の土器で浅鉢の口縁とおもわれる。6は口唇部を角形に作る土器で鉢類の口縁と思われる。細片のため全体の形状を把握できないが精製土器の可能性もある。これにやや近い土器はA地点のT-34で出土している（A地点土器実測図No.2）。7は細片で詳細不明だが、丹塗り土器の可能性があり、掲載することとした。胎土に微細な角閃石を含む。8は底部資料である。復元底径9.6cm。

縄文時代の土器（第66図、第20表、図版72）

晩期以外と思われる縄文土器は、A地点で1点、C地点で2点、D地点で4点出土している。そのうち滑石混入例が5点、角閃石を含む土器が2点である。ここでは図化可能な3点を掲載した。1はA地点8次調査7 T出土。口縁近くの破片と思われるが上部を欠損している為、全体の器形がわかりにくい。断面三角形の隆帯で眼鏡状の文様を構成している。胎土に滑石粒を多量に含む。後期の土器であろうか。2はD地点の7次調査17T出土。角閃石を含む胎土で褐色を呈し、撚糸状の施文原体を回転押捺して文様をつけていると思われる。3は8次調査2 T出土。角閃石を含む粗い胎土で淡赤橙色である。風化のため条痕様の文様にも見えるが、2と



第66図 F地点出土土器及び縄文土器実測図、出土銭貨拓影図 (S-1/2)

同様に回転押捺による文様と判断した。

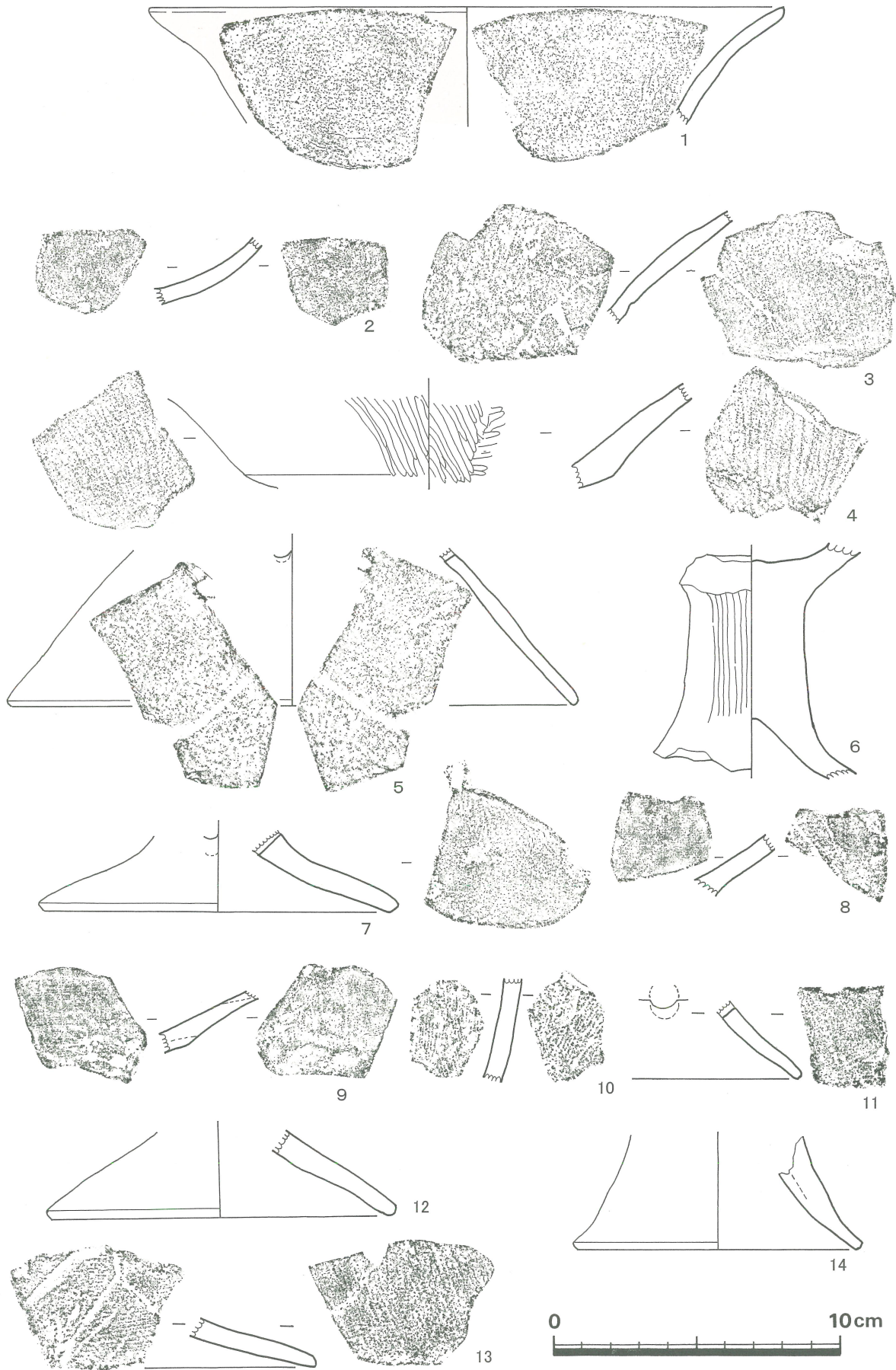
弥生時代の土器（図版72-1）

D地点の7次調査1 Tで弥生中～後期の土器が1点出土している。逆L字形の口縁を持つ甕の破片と思われる。色調は淡黄褐色で、焼成良く硬質である。胎土に角閃石を含む。

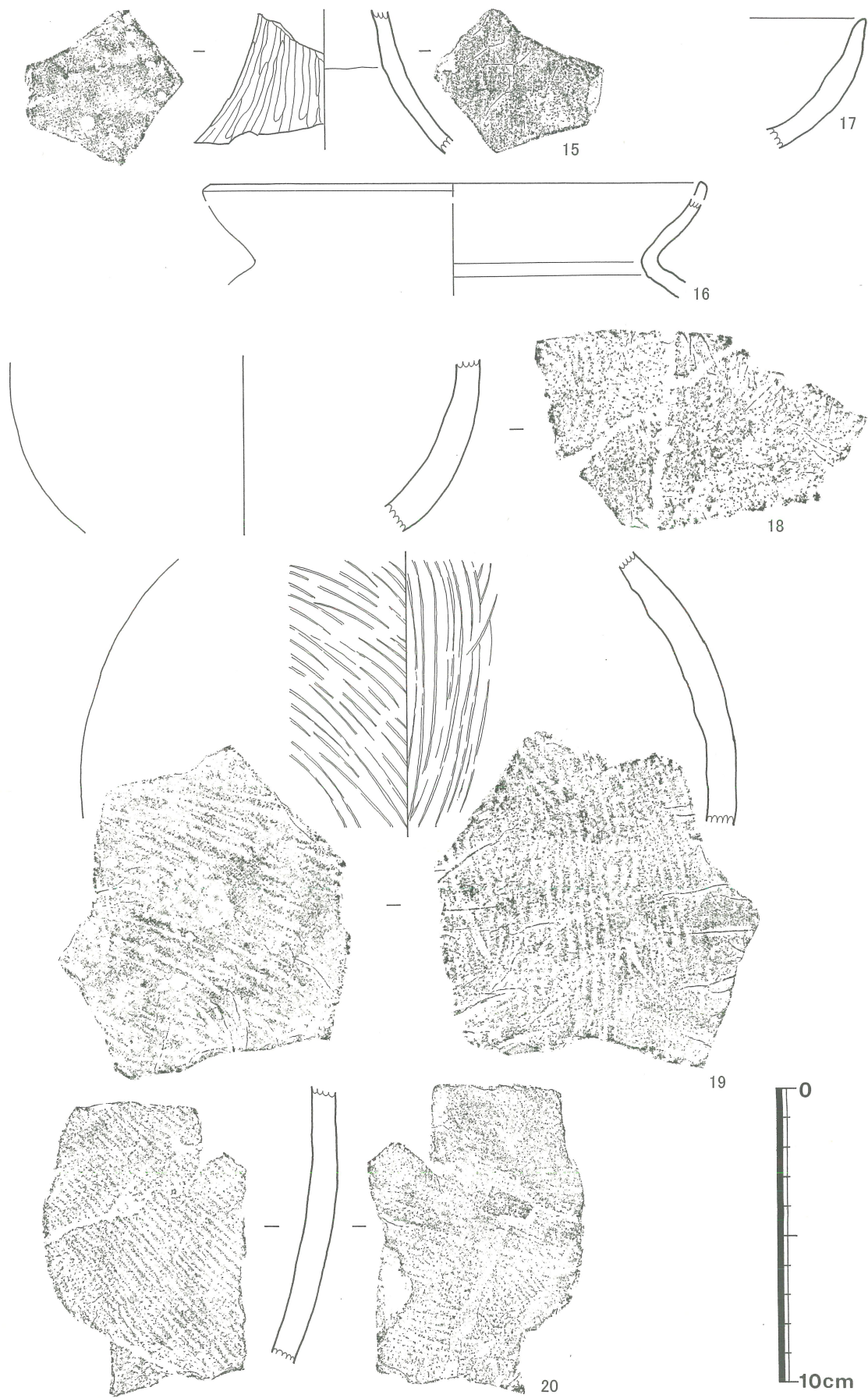
古墳時代の土器（第67・68図、第20表、図版73）

D地点の5次調査6 T、7 T、9 T、7次調査14 Tから合わせて約90点の土師器が出土しているが、そのうちの半数以上が5次9 Tからの出土である。

1～7は5次9 T出土の資料のうち、土師器土壇（遺構14）出土として取上げた土器である。1は高坏の口縁部であるが表面剥落のため、調整不明。外面にわずかに丹の痕跡が認められる。2は碗形になる坏部の破片と思われ、内外とも研磨。胎土に雲母粉末を含む。3は1と同様の器形の破片と思われるが、1は角閃石、3は雲母を含む胎土で別個体である。3には縦方向の研磨が認められる。4は内外とも研磨が施されている。胎土は1に共通する。5は脚部の破片で、上方に穿孔がある。表面の傷みで調整は不明。雲母微粉末及び微細な角閃石を含む。6は中実の脚部であるが傷みが激しい。坏部内面には研磨の痕跡がある。胎土に角閃石を含む。7は低平な形状の脚部であり、穿孔がわずかに残っている。外面には右下がりの研磨痕が観察される。胎土に雲母微粉末及び微細な角閃石を含む。8は内外とも研磨が施されている。焼成良く硬質である。胎土に雲母微粉末を含む。5次9 T出土。9は坏部の屈曲する部分であるが、内外とも研磨が認められ、焼成良く硬質である。胎土に角閃石を含む。5次7 T出土。10は内外ともにハケ目が認められる資料である。胎土に雲母微粉末を含む。5次7 T出土。11は低平な脚部の破片でわずかに穿孔が残っている。調整は不明であるが端部付近に丹塗りが残っている。角閃石を含む胎土である。5次7 T出土。12は5次6 T出土。ナデ仕上げと思われるが、内面はやや粗い。胎土に雲母粉末を含む。13は内外ともにハケ目が観察される。外面は縦方向、内面は同心円状に見える。5次9 T出土。14は脚部で5次7 T出土。表面が傷んでおり、調整は不明。内面に粘土の継ぎ目が見える。胎土に角閃石を含む。15は端部を欠くが脚部の破片と思われる。外面に縦方向の研磨が認められる。胎土に雲母粉末を含む。5次6 T出土。16は壺の頸部と思われる破片であるが、表面が傷んでおり調整は不明。胎土に雲母（金雲母）を含む。5次6 T出土。17は手捏ね風の土器で碗形になると思われる。胎土に角閃石を含む。5次7 T出土。18～20はいずれも器壁が厚く重量感のある破片であり、壺あるいは甕になるものと思われる。18は天地左右がよくわからないが径16cm程度に復元できる。表面が傷んでおり、調整は不明。角閃石を含む胎土である。5次7 T出土。19は表面をヘラ状工具及び板の小口等を用い荒くケズリ、その後、指でナデたように観察される。胎土に角閃石、雲母粉末を含む。5次7 T出土。20は板の小口等を利用して、表面を削っている。外面はケズリの後、ナデているように思われる。外面には調整が見えにくいほどの炭化物が付着している。胎土に角閃石を含む。



第67图 D地点出土土器实测图土师器1 (S-1/2)



第68图 D地点出土土器实测图土師器2 (S-1/2)

7次14T出土。

中世の資料（第65図16、第19表、図版72）

D地点5-3Tから播鉢の破片が出土している。中世の資料はこの1点のみである。鼠色で須恵質。外面はナデ仕上げ。復元口径30.8cm、卸目は7本1組と推定される。

近世の資料（第65図、第19表、図版72）

17は磁器の小杯である。釉の透明度がやや低い。簡略な染付けが施されている。C地点3-9Tで出土。18は土師皿の底部と思われる資料で糸きり痕が見える。きめ細かい胎土で、明るい肌色を呈する。長崎街道沿いのC地点3-26Tで出土。19は寛永通宝でいわゆる古寛永と称されるタイプである。D地点中央の3-15T付近の表採資料である。

近代の資料（第66図、第20表、図版72）

近代銭貨（明治・大正）6点が出土している。風観岳山頂部では、戦前には祭礼が開催されており、これらの銭貨はそれに伴うものと思われる。他にガラス製の小さな菓子器の破片等も出土している。

注1 諫早市教育委員会「風観岳支石墓群調査報告書」『諫早市文化財調査報告書』第1集 1976

注2 諫早市教育委員会「風観岳支石墓群一発掘調査概要報告書一」『諫早市文化財調査報告書』第15集 2002

注3 大村市側での調査地点では、席目（壘表状）の組織痕土器が出土している。

大村市教育委員会「風観岳支石墓群」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報Vol. 2』2000

1. 朱痕 1.条痕
2. ナデ 2.ナデ
3. 擦過 3.擦過
4. ミガキ 4.ミガキ
5. 組織痕 5.組織痕
6. 脚毛目 6.脚毛目

地点	器物番号	番号	年次-TNo	注記No	層	器種	部位	復元径(cm)	粘土の系統		外面の調整	内面の調整	整合法	外面の色調	口縁部		肩部		口縁部		肩部	
									貼付の系統	貼付の系統					突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置
A	47	1	25号 (S B21)	6	一	鉢	口縁	一	K	2	2	茶褐色										
A	47	2	25号 (S B21)	9	一	鉢	口縁	一	K	2	2	黒褐色										
A	47	3	25号 (S B21)	20	一	鉢	口縁	一	K	2	2	茶褐色										
A	47	4	25号 (S B21)	19	一	罍	胴部	一	K	2	2	茶褐色										
A	47	5	8-10	2	一	深鉢	口縁	一	K	1-2	2	黄褐色										
A	47	6	4-23	一	一	深鉢	胴部	一	K	3	2	黒褐色										
A	47	7	4-24	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	2	茶褐色										
A	47	8	4-15	一	一	深鉢	胴部	一	KH	1	1	褐色										
A	47	9	4-22	一	一	深鉢	胴部	一	KH	1	1	褐色										
A	47	10	4-12	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	3	黒褐色										
A	47	11	2-不明	一	一	鉢	口縁	一	K	4	4	灰茶色										

1) 粘土の系統の略記号。K=角閃石を含む KH=結晶片岩を含む 2) 磨欄のHは赤土層

地点	器物番号	番号	年次-TNo	注記No	層	器種	部位	復元径(cm)	粘土の系統		外面の調整	内面の調整	整合法	外面の色調	口縁部		肩部		口縁部		肩部	
									貼付の系統	貼付の系統					突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置
C	48	1	7-19	19	一	甕	口縁	一	KH	1	2	褐色										
C	48	2	3-10	一	一	甕	口縁	一	K	3	4	肌色										
C	48	3	1-5	一	H	甕	胴部	胴径30	K	1、2	1	褐色										
C	48	4	1-5	一	H	甕	口縁	一	K	1	1	褐色										
C	48	5	3-9	1	一	甕	胴部	一	K	3	一	肌色										
C	48	6	眼測No.7・17付近	一	一	甕	胴部	口径6.4	U	4	2	暗褐色										
C	48	7	眼測No.7・17付近	一	一	甕	胴部	口径6.4	U	4	3	肌色										
C	48	8	眼測No.7・17付近	一	一	甕	胴部	口径6.4	U	2	2	肌色										
C	48	9	眼測No.7・17付近	一	一	甕	胴部	口径6.4	K	1	1、2	内明	明褐色									

1) 粘土の系統の略記号。K=角閃石を含む KH=結晶片岩を含む 2) 磨欄のHは赤土層

土器観察表 D区

地点	器物番号	番号	年次-TNo	注記No	層	器種	部位	復元径(cm)	粘土の系統		外面の調整	内面の調整	整合法	外面の色調	口縁部		肩部		口縁部		肩部	
									貼付の系統	貼付の系統					突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置	突起位置
D	49	1	6-6	一	一	深鉢	口縁	一	K	2	2	赤褐色										
D	49	2	6-6	一	一	深鉢	口縁	一	K	1	1	暗褐色										
D	49	3	6-4	一	一	深鉢	口縁	一	K	一	一	暗褐色										
D	49	4	6-6	一	一	深鉢	口縁	一	K	2	2	黄褐色										
D	49	5	7-5	一	一	深鉢	口縁	一	K	2	2	褐色										
D	49	6	5-05	遺構12	一	深鉢	口縁	一	K	2	2	褐色										
D	49	7	6-6 S	一	一	深鉢	口縁	一	K	1	1	肌色										
D	49	8	7-02	83	一	深鉢	口縁	一	K	1	2	赤褐色										
D	49	9	5-07	一	一	深鉢	口縁	一	K	1	2	赤褐色										
D	49	10	5-07	一	一	深鉢	口縁	一	K	1	2	褐色										
D	49	11	6-6	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	2	褐色										
D	49	12	6-6	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	赤褐色										
D	49	13	6-6	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	赤褐色										
D	49	14	5-05	一	一	深鉢	胴部	一	K	2	2	褐色										
D	49	15	6-6	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	2	灰褐色										
D	49	16	6-6	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	2	赤褐色										
D	49	17	5-10	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	淡赤褐色										
D	49	18	6-4	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	赤褐色										
D	49	19	7-17	8	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	褐色										
D	50	20	34号 (S A 7)	遺構8	一	深鉢	胴部	一	K	2	4	褐色										
D	50	21	35号 (S A 8)	遺構7-1	一	深鉢	胴部	一	K	1	2	黄褐色										
D	50	22	6-6	一	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	赤褐色										
D	50	23	7-01	28	一	深鉢	胴部	一	K	1	1	茶色										
D	50	24	5-05	一	一	深鉢	胴部	一	U	4	3	褐色										

第14表 土器観察表 1

- 1. 条痕
- 2. ナデ
- 3. 擦過
- 4. ミガキ
- 5. 組織痕
- 6. 刷毛目

- 1. 条痕
- 2. ナデ
- 3. 擦過
- 4. ミガキ
- 5. 組織痕
- 6. 刷毛目

2) 「粘土の系統」の略記号。K=角四石を含む U=雲母を含む U K=角四石、雲母両方を含む 2) 層欄のHは表土層

地点	胴箇番号	番号	年次-TNo.	注記No.	層	器種	部位	復元径(m)	粘土の系統	外面の調整	内面の調整	接合法	外面の色調	丹	層欄	No.	備考
D	63	285	8-02	59	II	甕	底部	7.0	U K	4	1	肌色			285	複製、内面も内開している	
D	63	286	5-05	—	II	甕	底部	—	U K	2	2	暗茶褐色			286	底の底部分、厚み1.1cm	
D	63	287	6-5	—	II	甕	底部	—	K	4	4	赤褐色			287	厚み約定1.5cm	
D	63	288	7-02	71	IV	甕	底部	8.6	K	2	—	淡青褐色			288	複製、厚み1.2cm	
D	63	289	7-14	—	IV	甕	底部	6.4	K	1, 2	1, 2	赤褐色			289	複製、厚み0.8cm	
D	64	290	5-03	—	II	—	底部	9.0	K	—	—	暗茶褐色			290	294と接合	
D	64	291	7-09	5	—	—	底部	7.8	K	4	—	灰黒色			291	6片接合、厚み0.7cm	
D	64	292	5-04	—	II	甕	底部	—	U	—	—	灰黒色			292	丸底、厚み0.6cm	
D	64	293	6-4	—	II	甕	底部	12	U	4	—	肌色			293	高台状	
D	64	294	7-02	91	—	鉢カ	底部	—	K	1	—	黒褐色			294	台状、接着面で割れ	
D	64	295	6-6	—	II	鉢カ	底部	—	K	1	—	肌色			295	あるいは口縁カ	
D	64	296	6-6	—	II	甕	底部	—	U	4	1	赤褐色			296	ベラ書き2葉状	
D	64	297	5-05	—	II	甕	底部	8.0	K	—	—	暗茶褐色			297	土器片利用	
D	64	298	5-03	—	II	—	胴部	—	K	2	2	暗赤褐色			298	円孔未貫通	
D	64	299	6-6	—	II	甕	底部	—	K	—	—	肌色			299	粘土細粉り付けによる文様がある	
D	64	300	6-4	—	II	—	胴部カ	—	U	—	—	赤褐色			300		
D	64	301	6-6	—	I	—	胴部	—	K	—	—	黄褐色			301		
D	64	302	6-6 S	—	II	—	胴部	—	K	2	—	褐色			302		
D	64	303	7-10	85	—	土玉	—	1.7	K	—	—	赤褐色			303		
D	64	304	6-4	—	II	—	胴部	4.0×3.8	K	—	—	赤褐色			304		
D	64	305	7-13	1	—	—	胴部	—	K	1	—	赤褐色			305		

1) 「粘土の系統」の略記号。K=角四石を含む U=雲母を含む U K=角四石、雲母両方を含む 2) 層欄のHは表土層

地点	胴箇番号	番号	年次-TNo.	注記No.	層	器種	部位	復元径(m)	粘土の系統	外面の調整	内面の調整	接合法	外面の色調	丹	層欄	No.	備考
E	65	1	1-8-1	—	—	甕	口縁	—	K	—	—	—	黄褐色				
E	65	2	1-8-1	—	III	甕	口縁	—	K	1	1	—	黒褐色				
E	65	3	1-8-1	—	—	甕	口縁	—	K	—	—	—	黒褐色				
E	65	4	1-8-3	—	—	甕	胴部	—	K	1	—	—	黒褐色				
E	65	5	1-8-3	—	III	甕カ	口縁	—	K	2	—	—	黒褐色				
E	65	6	1-8-3	—	—	—	胴部	—	K	4	1→2	—	黒褐色				
E	65	7	1-8-3	—	—	—	胴部	—	K	4	2 ?	—	灰褐色				
E	65	8	1-8-3	—	III	鉢カ	口縁	—	K	—	—	—	肌色				
E	65	9	1-8-3	—	—	—	胴部	—	K	4 ?	—	—	肌色				
E	65	10	1-8-3	—	III	—	胴部	—	K	—	—	—	赤褐色				
E	65	11	1-8-3	—	—	—	胴部	—	K	2	1→2	—	赤褐色				
E	65	12	1-8-3	—	III	—	底部	6.2	K	2	2	—	褐色				
E	65	13	1-不明	—	H	—	胴部	—	K	4 ?	—	—	肌色				
E	65	14	52号 (SB12)	3	—	甕	口縁	—	U K	1→2	1-2 ?	—	褐色				
E	65	15	52号 (SB12)	1	—	—	—	—	K	1	1	—	淡褐色				

中世の土器

地点	胴箇番号	番号	年次-TNo.	注記No.	層	器種	部位	復元径(m)	粘土の系統	外面の調整	内面の調整	接合法	外面の色調	丹	層欄	No.	備考
D	65	16	5-03	—	II	鉢鉢	口縁	30.8	K	2	—	—	肌色				須原質。胴目は7本1組か

近世磁器銭貨調査表

地点	胴箇番号	番号	年次-TNo.	注記No.	層	器種	部位	復元径(m)	粘土の系統	外面の調整	内面の調整	接合法	外面の色調	丹	層欄	No.	備考
C	65	17	3-09	—	H	磁器小杯	口縁	—	—	—	—	—	—				須原質。胴目は7本1組か
C	65	18	3-26	—	H	土陶皿	底部	—	—	—	—	—	—				古寛永
D	65	19	3-15	付近	H	寛永通宝	—	—	—	—	—	—	—				古寛永

1) 層欄のHは表土層

第19表 土器調査表 6

- 1. 条痕
- 2. ナデ
- 3. 擦過
- 4. ミガキ
- 5. 組織痕
- 6. 刷毛目

地点	種別番号	番号	年次-TNo	注記No	器種	部位	復元径(cm)	胎土の系統		胎土の調整	胎土の色調	丹	口縁部		肩部		備考	
								胎土の系統	胎土の色調				突帯位置	突帯調整	突帯位置	突帯調整		
F	66	1	4-6	-	I 壺(鉢)	口縁	22.2	K	2	淡赤褐色	内外面とも刷落							
F	66	2	4-10	-	I 鉢	口縁		K	4	肌色	内外面とも刷落							
F	66	3	4-6	-	H 鉢	口縁		K	4	赤褐色	内外面とも刷落							
F	66	4	4-10	-	H 鉢(器)	口縁		K	4	淡赤褐色	接合部が見える							
F	66	5	4-6	-	I 鉢	口縁		K	4	赤褐色	穿孔の一部が残る							
F	66	6	4-6	-	I 鉢	口縁	20.0	U	4	赤褐色	穿孔の一部が残る							
F	66	7	4-10	-	H 壺	口縁	12.6	U	4	赤褐色	穿孔の一部が残る							
F	66	8	4-6	-	I 壺	底部		K	4	暗茶褐色	内外面とも刷落							

1) 「胎土の系統」の略記号。K=角四石を含む U=雲母を含む 2) 層欄のHは表土層

土師器観察表

地点	種別番号	番号	年次-TNo	取上げNo	層	器種	部位	復元径(cm)	胎土の系統	胎土の色調	丹	備考
D	67	1	5-09	14-7	-	高坏	坏部	22.2	K	2	淡赤褐色	内外面とも刷落
D	67	2	5-09	14-4	-	高坏	坏部		U	4	肌色	内外面とも刷落
D	67	3	5-09	14-6	-	高坏	坏部		U	4	赤褐色	内外、ヘラミガキ痕
D	67	4	5-09	14-8	-	高坏	坏部		K	4	淡赤褐色	接合部が見える
D	67	5	5-09	14-2	-	高坏	坏部	20.0	U	4	赤褐色	穿孔の一部が残る
D	67	6	5-09	14-1	-	高坏	坏部		K	-	赤褐色	穿孔の一部が残る
D	67	7	5-09	14-5	-	高坏	坏部	12.6	U	4	赤褐色	穿孔の一部が残る
D	67	8	5-09	14-3	-	高坏	坏部		U	4	暗茶褐色	内外面とも刷落
D	67	9	5-07	-	-	高坏	坏部		K	4	赤褐色	焼成よく、硬質。
D	67	10	5-07	-	-	H 壺	脚部		U	6	黄褐色	
D	67	11	5-07	-	-	高坏	坏部		K	-	赤褐色	穿孔の一部が残る
D	67	12	5-06	-	-	高坏	坏部		U	2	淡赤褐色	内面荒い仕上げ
D	67	13	5-09	-	-	高坏	坏部		K	6	黄色	内面の刷毛目は同心円状
D	67	14	5-07	-	-	高坏	坏部	10.0	K	-	赤褐色	内面、継ぎ目見える
D	68	15	5-06	-	-	高坏	坏部		U	4	黒色	胎土精良。硬質
D	68	16	5-06	-	-	壺	頸部		U	-	黄褐色	内面傷み激しい
D	68	17	5-07	-	-	壺	口縁		K	-	黄褐色	手捏ね風
D	68	18	5-07	-	-	H 壺	口縁	16.0	U	2	淡赤褐色	天地不明、頭い、
D	68	19	5-07	-	-	H 壺	脚部		U	2	淡赤褐色	焼成よく、硬質。
D	68	20	7-14	6	-	壺	脚部		K	6	黒色	外面炭化物付着

1) 「胎土の系統」の略記号。K=角四石を含む U=雲母を含む 2) 層欄のHは表土層

縄文土器観察表

地点	種別番号	番号	年次-TNo	取上げNo	層	器種	部位	復元径(cm)	胎土の系統	胎土の色調	丹	備考
A	66	1	8-07	-	H	口縁		-	K	2	淡赤褐色	無彫欠。
D	66	2	7-17	-	H	脚部		-	K	-	褐色	樺太林の文様がある
D	66	3	8-2	13	-	脚部		-	K	-	淡赤褐色	樺太林の文様がある

1) 「胎土の系統」の略記号。K=角四石を含む K S=滑石を含む 2) 層欄のHは表土層

弥生土器観察表

地点	種別番号	番号	年次-TNo	取上げNo	層	器種	部位	復元径(cm)	胎土の系統	胎土の色調	丹	備考	
D	66	1	7-01	84	-	壺	口縁		-	K	2	淡赤褐色	この時期の土器は1点のみ出土

1) 「胎土の系統」の略記号。K=角四石を含む

近代銭貨観察表

地点	種別番号	番号	年次-TNo	取上げNo	層	名称	発行年	備考
F	66	1	4-8	-	I	半銭銅貨	明治8年	
F	66	2	4-10	-	I	壹圓銅貨	明治10年	
A	66	3	4-20	-	I	銅1銭青銅貨	大正7年	大正5年-昭和13年発行
F	66	4	4-4	-	I	銅1銭青銅貨	大正8年	
F	66	5	4-6	-	-	銅1銭青銅貨	大正10年	
F	66	6	4-6	-	-	銅1銭青銅貨	大正13年	

年次	遺物注記	縄文~弥生				丹塗り						土器系 総点数		
		点数	雲母系	角閃石系	比率	雲母系	角閃石系	縄文	弥生	古代	中世		近世	その他
1次	97 F K 03H	1	0	1	0%									1
1次	97 F K 04H	1	0	1	0%									1
1次	97 F K 05H	9	5	4	56%									9
1次	97 F K 05Ⅲ	1	1	0	100%									1
1次	97 F K 06Ⅱ	3	2	1	67%									3
1次	97 F K 06H	1	0	1	0%							1		2
1次	97 F K 08 I	0	0	0								2		2
1次	97 F K 08H	1	0	1	0%									1
1次	97 F K 08	14	1	13	7%	1								14
1次	97 F K 08Ⅲ	19	1	18	5%	1								19
1次	97 F K 08Ⅳ	2	0	2	0%									2
1次	97 F K 08ミゾ	17	0	17	0%									17
1次	97 F K 09H	6	2	4	33%									6
1次	97 F K 12 I	1	0	1	0%									1
1次	97 F K	1	0	1	0%									1
	小計	77	12	65	16%	2		0	0	0	0	3	0	80
2次	98 F K 3Ⅱ層	2	0	2	0%									2
2次	98 F K 3Ⅲ層	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 4Ⅱ層	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 34	20	0	20	0%									20
2次	98 F K 34Ⅱ層	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 34掘	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 34pit内	2	0	2	0%									2
2次	98 F K 35Ⅱ層	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 35H	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 37	1	0	1	0%									1
2次	98 F K 38	5	0	5	0%									5
2次	98 F K 40Ⅱ層	2	0	2	0%									2
2次	98 F K H	2	1	1	50%									2
	小計	40	1	39	3%	0		0	0	0	0	0	0	40
3次	99 F K 3-1	7	2	5	29%									7
3次	99 F K 3-2	9	3	6	33%									9
3次	99 F K 3-3	9	5	4	56%									9
3次	99 F K 3-3 H	1	1	0	100%									1
3次	99 F K 3-4	3	2	1	67%									3
3次	99 F K 3-5	16	9	7	56%									16
3次	99 F K 3-6	51	13	38	25%		1				1			52
3次	99 F K 3-6 排土	2	1	1	50%									2
3次	99 F K 3-7 耕土	1	1	0	100%									1
3次	99 F K 3-9	5	1	4	20%		1							5
3次	99 F K 3-9 カク乱	1	0	1	0%						2			3
3次	99 F K 3-10	2	0	2	0%									2
3次	99 F K 3-11	1	0	1	0%									1
3次	99 F K 3-15	19	7	12	37%						2			21
3次	99 F K 3-15 H	6	1	5	17%									6
3次	99 F K 3-22	1	0	1	0%									1
3次	99 F K 3-25 一插	1	1	0	100%									1
3次	99 F K 3-26 H	2	0	2	0%						1			3
3次	99 F K 3-30	3	0	3	0%									3
	小計	140	47	93	34%	0	2	0	0	0	0	6	0	146
4次	00 F K 4-4 カク乱	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-6	9	0	9	0%									9
4次	00 F K 4-6 I	26	0	26	0%									26
4次	00 F K 4-6-2	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-8	2	0	2	0%									2
4次	00 F K 4-10 I	4	0	4	0%									4
4次	00 F K 4-10 カク乱	11	0	11	0%		1							11
4次	00 F K 4-11	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-12	5	0	5	0%									5
4次	00 F K 4-13 I	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-15	8	0	8	0%									8
4次	00 F K 4-21 II	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-22 II	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-24	5	0	5	0%									5
4次	00 F K 4-24 II	2	0	2	0%									2
4次	00 F K 4-26	2	0	2	0%									2
4次	00 F K 4-26 II	1	0	1	0%									1
4次	00 F K 4-38	10	0	10	0%									10
	小計	91	0	91	0%	0	1	0	0	0	0	0	0	91
5次	01 F K 5-1 H	26	1	25	4%									26
5次	01 F K 5-1 2層	1	0	1	0%									1
5次	01 F K 5-1 3層	3	0	3	0%									3
5次	01 F K 5-2 2層	44	15	29	34%									44
5次	01 F K 5-2 H	7	1	6	14%	1								7
5次	01 F K 5-3 2層	98	2	96	2%	1								98
5次	01 F K 5-3 H~2層	5	0	5	0%									5
5次	01 F K 5-4 2層	9	4	5	44%									9
5次	01 F K 5-4 H	1	0	1	0%						1			2
5次	01 F K 5-5 H	2	2	0	100%									2
5次	01 F K 5-5 2層	129	46	83	36%	16	1							129
5次	01 F K 5-6 2層	59	14	45	24%					4				63
5次	01 F K 5-6 H	3	0	3	0%					3				6
5次	01 F K 5-7 2層	20	4	16	20%		1			15				35
5次	01 F K 5-7 H	27	5	22	19%					24				51
5次	01 F K 5-8 2層	8	1	7	13%					2				10
5次	01 F K 5-8 H	3	0	3	0%					5				8
5次	01 F K 5-9 2層	9	2	7	22%					11				20
5次	01 F K 5-10 2層	54	2	52	4%	1								54
5次	01 F K 5-10 H	1	0	1	0%									1
5次	01 F K イ-4	1	0	1	0%									1
5次	01 F K イ-10	1	0	1	0%									1
5次	01 F K イ-10 フキン	1	0	1	0%									1
5次	01 F K イ-12 2層	2	1	1	50%									2
5次	01 F K イ-12 3層	3	1	2	33%									3
5次	01 F K イ-12 pit 5	1	0	1	0%									1
5次	01 F K イ-12 フキン	1	1	0	100%									1
5次	01 F K イ-13 pit12	1	0	1	0%									1

第21表 年次別・トレンチ別出土土器集計表 1

第2項 石器

本遺跡から出土した1次から8次調査までの石器は第23・24表に掲げている。この数値は表層土分を除いており、表層土分を含めると優に2万点を超えている。石核や石器製作時の石片、剥片及び使用痕を認める剥片を合計すると12,938点を数え、全体の93.4%と高い比率を示している。これらの数値は調査区域全体を通してみたときのものである。その中から出土した石器とされるもの、あるいは使用痕の認められるものについてそれぞれ代表的なもの201点を選んで図化し次に説明を加える。

石鏃 (第69・70図1～74、第26表、図版74・75)

第23・24表には296点を数えているが、表層土分を含めると375点が出土した。ここでは全体の傾向を知るため、表層土分を含めた249点を分析の対象とし、石鏃形態分類表(第28・29表)に取り上げた。さらにこれらの中から石鏃未製品含め76点を図化している。石鏃は全体の「かたち」で14分類、「挟り方」で6分類した。これは近接する下峰原高場遺跡の石鏃形態分類に準拠し、同遺跡に見られなかったタイプを追加して調整したものである(第25表)。

第25表には風観岳支石墓群と下峰原高場遺跡の石鏃タイプ別出土数と百分比をそれぞれ表として添えた。この表でみると風観岳支石墓群では2・4・10・13類が、下峰原高場遺跡では2・6類が比率的に高い。この6類は報告書(注1)でも触れているが、縄文時代早期末頃の所産とみられ、風観岳支石墓群では7%ほど確認されている。しかし下峰原高場遺跡においては24%と高い比率を示し、これは土器の出土傾向と相似している。これに対して2類は共に多く風観岳支石墓群では19%、下峰原高場遺跡では40%と高率である。この類の石鏃は全時期をとおして通有のものである。風観岳支石墓群出土例は下峰原高場遺跡に比して素材となる剥片が扁平で、かつ周縁よりの細調整が少ないこと、さらに重量が軽い点に相違点を見ることができる。この2類の重量が重いものは6類と供伴するものと思われ、また軽量の類は晩期に伴うものと想定される。風観岳支石墓群では新たに13・14類が加わるのが下峰原高場遺跡との大きな相違点であり、この類については突帯文土器に伴う例が報告されており(注2)、風観岳支石墓群においても突帯文土器の時期に属するものと考えている。

石鏃の型式では、有茎式と無茎式に分類し、無茎式において平基無茎式と凹基無茎式に分類した。さらに「かたち」で

- 1 A…二側縁が直線で三角形を呈するもの
- 2 A…二側縁が外側に湾曲するもの
- 3 A…二側縁が内側に湾曲するもの
- 4 A…左右が非対称形のもの
- 5 A…基部が左右非対称のもの
- 6 A…五角形を呈するもので、肩部が上位にあるもの
- 7 A…五角形を呈するもので、肩部が下位にあるもの
- 8 A…七角形を呈するもの

- 9 A…逆ハート形を呈するもの
- 10A…下半は大きく外反し、上位は1・2に類するもの
- 11A…2 A型で最大幅が体幹中位近くにあるもの
- 12A…6 A型で二側縁の下方が抉れるように内湾するもの
- 13A…6 A型を基本とし、体幹が寸詰まりのもの
- 14A…13A型を基本とし、尖端部を認めないものと分類される。

さらに基部の「抉り方」で

- B…浅く弧状に抉りこむもの
- C…体幹の中心に向け直線的に抉りこむもの
- D…Cより深く抉りこむもの
- E…丸く抉りこむもの
- F…抉りこみが体幹中位近くまで認められるものと類別した。

1 A類…1～4

1・3ともに透明感のある漆黒黒曜石を素材とし、素材面が看取できないほどに丁寧な平坦剥離で仕上げている。左脚を折損している。2は灰色の縞模様が入る透明感のある黒曜石の薄い剥片を素材に、周縁から平坦剥離を行って整形している。バルブは下位にあるが折除している。4は安山岩の薄い剥片を素材とし、周縁をわずかに調整して整形する。

1 B類…5

安山岩の剥片を素材とし、やや荒い調整で仕上げている。先端部を裏面方向よりの加圧により折損している。

1 C類…6・7

6は薄い剥片を素材とし、周縁より丁寧な調整を施すが、一部素材面が看取される。7は薄い凸レンズ状の体幹を呈し、基部は体幹中心に向けて直線的に抉りこんでいる。

1 D類…8

幅広薄手の剥片を素材とし、丁寧な平坦剥離を実施している。体幹中央は稜をなしている。周縁はわずかに鋸歯状となる。右脚は折損している。

1 E類…9～11

9は三角形を呈し、やや外開気味の脚を作り出す。10は細身で凸レンズ状の体幹をなし、周縁はわずかに鋸歯状をなす。11は三角形を呈しており、周縁からの丁寧な整形を行う。脚端部は丸く収めている。

2 A類…12～16

12は幅広の薄い剥片を素材とし、やや雑な平坦剥離により整形を行う。右脚は欠損している。13は主要剥離面で平坦剥離をわずかに施し、背面は荒い剥離によって整形している。14は主要剥離面を残すなど全体にやや荒い剥離で整形を行うところは前の2点と同じ手法である。15は

形式 かたち	平基		凹基			
	無形式 A	B	C	無形式 D	E	F
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						

風観岳支石墓群出土石鏃

	A	B	C	D	E	F	計	%
1	11	4	14	4	6	0	39	15.66
2	24	14	3	0	6	1	48	19.28
3	0	0	0	0	0	0	0	0
4	22	18	0	1	1	0	42	16.87
5	4	5	0	0	0	0	9	3.614
6	10	2	7	0	0	0	19	7.631
7	1	8	0	0	0	0	9	3.614
8	4	1	0	0	1	0	6	2.41
9	1	0	0	0	0	0	1	0.402
10	26	22	6	2	1	0	57	22.89
11	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	0	0	0	0
13	5	9	0	0	1	0	15	6.024
14	0	4	0	0	0	0	4	1.606
	108	87	30	7	16	1	249	100

下峰原高場遺跡出土石鏃

	A	B	C	D	E	F	計	%
1	4	7	4	0	9	0	24	19.35
2	2	3	9	4	28	4	50	40.32
3	0	0	1	0	0	0	1	0.806
4	2	0	0	0	1	0	3	2.419
5	0	0	0	0	0	0	0	0
6	5	4	5	0	16	0	30	24.19
7	1	0	0	0	4	0	5	4.032
8	0	0	0	1	0	0	1	0.806
9	2	0	0	0	2	0	4	3.226
10	2	1	0	2	0	0	5	4.032
11	1	0	0	0	0	0	1	0.806
12	0	0	0	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0
14	0	0	0	0	0	0	0	0
	19	15	19	7	60	4	124	100

第25表 石鏃形態分類図・表及び風観岳支石墓群・下峰原高場遺跡出土石鏃比較表

主要剥離面側を凶化したが、表裏共に最小限の剥離で整形し、素材面を多くのこしている。16は透明感のある良質黒曜石の小型横広剥片を素材にして主要剥離面は周辺よりの粗いリタッチにより、また背面には傾斜剥離を加えて整形している。体幹の横断面はやや台形に近い形である。

2 B類…17～19

17は全体に丁寧な剥離により整形されている。18は背面から主要剥離面に向かって平坦剥離を施して背面とともに丁寧に整形している。最大幅は基部よりわずかに上がり、先端部は欠損する。19は横広剥片を素材にし、周縁からの加工はステップで終わるものが多くリタッチの数は少ない。左縁に打面を残しており未完成の可能性もある。

2 C類…20

20の素材は安山岩で凶は背面を示す。裏側の主要剥離面は4回ほどの平坦剥離で整形されている。左脚部は欠損している。

2 E類…21・22

21は透明感がある良質の黒曜石を素材に表裏ともに入念な平坦剥離によって整形されている。脚部は側縁下端から体幹中心に向かって斜めに調整し基部の整形部と交叉させて特徴的な先端部に整形している。22の素材は安山岩で基部の挟りはかなり深い。左脚部先端を欠損している。

2 F類…23

23は素材に安山岩を用い周縁からの平坦剥離によって整形している。凶は背面であるが裏面の主要剥離面には右脚部全体に及ぶ平坦剥離がみられる。右脚先端は欠損している。

4 A類…24・25

24は35号支石墓（S A 8）上部蓋石の下から出土した。やや厚みがある灰色黒曜石剥片を素材に周縁よりやや荒い調整を施す。a面に見るように左縁側に主要剥離面を残し、打面は取り除かれている。25は漆黒の黒曜石剥片を用い周縁からの平坦剥離によって整形しているが背面には一部に自然面を残し、主要剥離面には素材面を残している。

4 B類…26～29

26は灰黒色黒曜石の透明感があるが一部に不純物を含む剥片を素材にしている。全体に平坦剥離による整形を施し、先端部はつまみ状になる。右肩部と左脚先端部は欠損している。27は灰色黒曜石を素材にして小型にしては全体に荒い平坦剥離で整形されている。特に主要剥離面は素材面を残していて、右縁は主要剥離面よりの傾斜剥離によって調整・整形している。左右脚部の先端をわずかに欠損している。28の素材は安山岩である。主要剥離面は殆ど調整せず、側縁と基部を主要剥離面からの傾斜剥離によって調整・整形している。右縁は鋸歯状を呈する。29は白色不純物を含む灰黒色黒曜石を素材にする。全体をやや荒い平坦剥離で調整・整形している。裏面が主要剥離面であるが素材面は留めていない。

4 D類…30

30は灰黒色黒曜石剥片を素材にしている。全体を入念な平坦剥離で調整・整形していて、こ